

表紙, 目次, 雑纂, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38702

明治三十五年十二月二十六日發行

十全會雜誌

第二十五號

《非寶品》

全澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第二十五號目次

○原著

○江田島産「アノフェーレス」
蚊ノ研究(第一回)

醫學得業士 鈴木寛之助述

○顔面筋ノ侵襲ヲ被リタル筋
病性進行性筋肉萎縮(デジ
エリン、ランヅデー氏筋肉
萎縮)ノ一例 (承前)

醫學得業士 眞柄佐一郎述

○血痕検査ニ於ケル一二物料
ト「ヘミン」結晶ノ關係ニ
就テ

教 授 村上 庄太述

○雜纂

○風疹ノ流行

特別會員 岡本京太郎

○臨牀上ニ於ケル醫事斷片

醫、四年級 諸橋喜久次

○會報

○叙任辭令○會員動靜○在京會員移動○新入學生諸君ヲ

迎フ○卒業生諸君ヲ送ル○本校規則改正○本會役員○三
十四年度十全會費決算報告○三十五年度十全會歲入歲出
豫定計算書○入學式○卒業式○講話會○秋氣運動會○實
彈射擊演習○醫學科第四年級々會○同三年級々會○同一
年級々會○分教場生徒取締所○寄贈書○大能校丁ノ慰勞
○入學試驗及第ノ結果○入退會者

○通信

○金子教授ヨリノ通信○在京本校出身者同窓會報告○高
岡高勝氏ノ通信○香港ニ於ケル所見

○會告

○寄贈書籍○十全會費領收

○廣告

○數件



雜纂

○風疹ノ流行

特別會員 岡本京太郎(金澤)

余ハ本年四月ヨリ今ニ至ルノ間一種ノ急性發疹性傳染病ニシテ主トシテ童兒期ヲ犯スモノヲ實驗セシト多シ(但シ余ハ大人ニ接スル場合少ク從テ其本病ニ於ケル關係ヲ知ラス)其病狀一見輕度ノ麻疹ノ如キモ稍之ト其經過ヲ異ニス之ヲ畧記スレハ小兒初メ一乃至二日間微熱或ハ輕熱(強度ナルモ卅九度ヲ起ヘス)ヲ現ハシ遊戲不活潑多クハ咽頭痛頭重頭痛ヲ訴ヒ嘔吐ヲ來シ或ハ嘔吐便秘或ハ少ク下痢スルモノアリ或ハ輕咳ヲ有シ咽頭稍充血シ口蓋懸擁垂ニハ小紅斑ヲ生スルモノアリ多クハ頸線、乳頭突起腺、ハ豌豆大乃至指頭大ニ腫張シ壓痛ヲ有スルモノアリ又輕度ノ結膜加答兒ヲ來シ第二日遅クモ第三日ノ朝ヨリ

大抵始メ顔面次テ頸背胸腹四肢ニ麻疹ト區別シ難キ小蕊微疹ヲ生シ症ニヨリテ粗密ノ差アルモ數時間乃至一日中ニ前記諸部悉ク之ヲ現出シ後者新發シツ、アルニ前者既ニ褪色ヲ始ム則チ急ニ出テ、速ニ消ユルナリ而シテ前驅期ニ存セシ熱ハ發疹ト同時ニ俄然分離シ或ハ發疹ノ現出後半日乃至一日ニシテ疹尙新發ヲ繼續スルニ拘ハラス分利シ患兒ノ自覺症モ亦發疹期ニ入りテ却テ輕快シ喉頭炎氣管支炎ノ症ヲ來スコトナク咽頭痛腺腫モ速ニ減退シ疹ハ新發ノモノヨリ褪色シ著シキ痒感モ落屑モナク發疹后二日乃至四日ニシテ全ク其痕ヲ留メサルニ至ル余ハ全經過中少シモ体温溫ノ上昇ヲ認メ得サリシモノアリキ而シテ未タ遺后病合併症ヲ見ルコトナク預后極メテ良ナリ

以上ハ本病ノ稍正規ナル強度ノ症ヲ摘記セシモノニシテ輕度ナル醫治ヲ乞ハサルモノ又斟カラサルカ如シ試ミニ之ヲ麻疹ニ比シテ其要點ヲ抄録スレハ

第一 粘膜ノ官能障害少シ特ニ喉頭炎氣管支炎ノ現象ヲ呈セス

第二 殆ント常ニ頸腺腫張ス

第三 熱ハ一汎ニ麻疹ヨリ輕ク比較的前驅期ニ高ク發

疹期ニ入り急ニ分利ス

第四 疹ノ發現急頓ニシテ消散又速ナリ則チ發疹期及

退行期短シ

第五 自覺症モ發疹期ニ入りテ輕快ス

如此本病ハ麻疹ニ似テ而ノ非ナリ余ハ尙麻疹ヲ經過シタ

ルモノニ本病ヲ發シタルモノ數例ヲ有ス (一)八年一ケ

月ノ男兒五年十一ケ月(一昨年五月)ノ時其弟妹ト共ニ重

症ノ麻疹ニ罹リ余自ラ診療シタモノ本年七月十六日ヨリ

高度ノ本病ニ罹レリ (二)七年八ケ月ノ女兒六年前其兄

ト共ニ重病ノ麻疹ヲ經シカ本年七月九日ヨリ高度ノ本病

ヲ來セリ (三)十一年三ケ月ノ男兒二才ノトキ其姉ト共

ニ麻疹ヲ經タリシカ本年七月十五日ヨリ中度ノ本病ニ惱

ミタリ (四)六年五ケ月ノ男兒二才ノ時麻疹ヲ經シカ本

年七月四日ヨリ高度ノ本病ヲ患ヒタリ (五)前者ノ姉八

年五ケ月ノモノ四才ノ時彼ト共ニ麻疹ヲ經タルニ七月二

十日ヨリ輕度ノ本病ヲ來セリ

其他二十四才ノ一男六十才ノ一女又幼時麻疹ヲ經過セシ

ニ本病ヲ患ヘシヲ見タリ則チ本病ハ

第六 麻疹ヲ經過セシモノヲモ襲フ

之ニ由テ是ヲ觀レハ本病ハ所謂風疹(ルベオラ「ロエテル

ン」又流行性薔薇疹ト云フ我俗人之ヲ「三日ハシカ」ト稱

ス)ト名クル一種特別ノ疾病ナルカ如シ尤モ當時猶風疹

ヲ以テ麻疹ノ輕種ト見做シ特別ノ症トナスヲ肯ンゼサル

學者ナキニ非スト雖モ多クハ獨立ノ急性發疹性傳染病ト

論述スルカ如シ

余ハ參考セシ僅カノ成書(バギンスキー氏小兒科學、ヘー

ノッホ氏小兒科學、ゲルハルト氏小兒科全書、モンチー

氏小兒科學カボジー氏皮膚病學等)ニヨリ是認派ノ論據

ヲ睨フニ蓋シ左ノ數點ニ歸スルカ如シ (イ)麻疹ノ再感

ハ甚タ稀ナルニ麻疹流行ニ次テ直ニ風疹流行シ前ニ麻疹

ヲ經シモノモ之ニ犯サルコト多シ (ロ)風疹流行後ニ麻

疹猩紅熱ノ死數減ゼズ (ハ)同一人ニシテ麻疹猩紅熱風

疹ヲ逐次ニ經過スルモノアリ又反對ニ麻疹猩紅熱カ既ニ風疹ノ發疹中ニ感染シテ續發スルコトアリ (ニ)風疹ハ每流行皆輕症ナリ (ホ)風疹ノ經過ハ麻疹ニ類スル點アルモ實ハ異ナリ (ヘ)風疹ハ重キ合併症ヲ來スコト稀ナリ (ト)粘膜ノ官能障害ハ麻疹ヨリ輕シ

否認派ノ說トシテハ余只カボシー氏ヲ讀ミシノミ氏曰ク特種ノ疾病風疹トシテ記述セラル、症狀ハ麻疹ノ輕症ナルモノト少シモ差異ナシ且ツ之カ眞ノ麻疹ニ移行スルトハ只否認派ノミナラス是認派ニモ證明セラレシ所ニシテ又既ニ麻疹ヲ經過セシモノニ來レハトテ特別ノ意味ヲ有セス完全ノ症ヲ呈スル麻疹スラ同一人ニ二三回見ルコアレハナリ余等ハ謂所風疹ナルモノヲ麻疹ノ變種ト見做シ一種獨立ノ疾病ト稱スルヲ所以ナシトスルモノナリ此爭論ニ就テハ余尙薄キ唇ヲ閉テ單タ自ラ信スル所ニ從ヒ本年流行スル急性發疹性傳染病中麻疹ニ似テ非ナル所謂風疹ナルモノアリト報告シテ止マン而已

(三十五年八月一日稿)

○臨牀上ニ於ケル醫事斷片

◎舌苔ニ就テ

醫學科四年生 諸橋嘉久次

日進醫學ノ今日其病源治療ノ未ダ不明ナル者少トセズ余ハ内科臨牀上常ニ見ル所ノ症狀ニシテ其病原明ナラザル者アリ何ゾヤ舌苔ノ事はナリ抑モ舌苔ノ検査タルヤ醫師タル者ハ勿論俗人ト雖モヨク舌苔ノ如何ニテ感冒トカ胃腸ノ疾病トカニ注意スルハ諸君ノ實際上知ル所ナリ夫故ニ醫師タル者唯其何病ニ何舌苔アル事ノミ知リテ其原因ヲ明ニセザレバ俗人ト異ナル事ナカラン

昔ヨリ舌苔ノ原理ニ就キテ多クノ說アルト雖モ一定セズ其諸說タルヤ唯想像ニ過ギズシテ彼ノ肺結核患者ノ咯血ヲ起ス理ノ如キ確實ナル證明出來ザルナリ余ハ休曜中偶々或ル朋友ニ舌苔ノ原理ヲ尋問セラレ初メテ注意ヲ加ヒ解剖上生理學上病理上諸々ノ方面ヨリ研究セシモ一トシテ得ル所ナシ勿論顯微鏡の検査、化學的検査動物試驗等ハ一學生トシテ充分成シ難キヲ以テ余ハ唯學理上ヨリノ

ミ如何ニシテ舌苔來ルヲ思考セシニ過ズ夫故ニ其研究タルヤ恰カモ木ニ昇リ魚ヲ捕フルニ似タリ乍併余ハ是ヲ學理上ノミニマレ研究スル亦以テ益ナシトセズ

諸君ノ屢々内科臨床上殆ンド毎常消化器疾患ニ於テ舌背ニ白色ノ苔アルヲ見ラル可シ又急性熱性病ニアリテハ舌ハ乾燥シテ汚穢色ノ硬皮ニテ覆ル特ニ猩紅熱ニ於テハ覆盆子狀舌ヲナシ驚口瘡ニ於テハ舌苔白色ニテ乾酪様ヲ呈シ窒扶斯患者ノ煙樣暗黑色ノ舌苔ヲ有スル事モ臨床上屢々實檢スル所ナラン其外藥物的作用ニテ舌苔ヲ起ス事アリ以上ノ如ク舌苔ニ種々アルニ從テ其病原乃チ舌苔ヲ起ス原因モ多少異ナルハ當然ノ理ナル可シ

抑モ口腔ニハ種々ノ菌体常ニ存シ或ル人ノ検査ニ依ルト五十四種類ノ黴菌ヲ有スト（「ガルテン」氏ハ二十四種ノ酸ヲ作ル菌口中ニアリト）其多キ事實ニ驚クベシ其主ナル者ハ葡萄狀菌、連鎖狀菌球菌等ニシテ其病的の時ニ於テハ口腔ノ不潔ヲ免レザルヲ以テ如何ニ多クノ他種類ノ菌体ガ口腔内ニ發生スルヤ想像セラル可シ彼ノ驚口瘡ニ於

ケル舌苔ハ驚口瘡菌ニ依ル事ハ確實ナルモ他ノ疾病ニ於ケル特異ナル舌苔ハ是又一種ノ菌ニ依ルナランカ否ヤ未ダ驚口瘡ニ於ケル如キ説明アル者ナシ而シテ生理的我々ハ又皮膚ニマレ粘膜ニマレ新陳代謝營マル舌ニ於テモ絶ズ上皮ノ剝脫アリ特ニ血行盛ナル時即チ熱性病者ノ舌ノ如キハ健康體ヨリ上皮ノ剝脫多カラン是レ畢竟舌苔ノ熱ト關係アルノ原理ナランカ兎角關係ナキニ非ズ而シテ舌粘膜上皮ノミ剝脫スルニアラズシテ口腔諸粘膜モ然リ是等上皮剝脫セル者重疊スル時ハ舌苔形成上大ニ影響ヲ及スベキ者ト余ハ信ズ消化器疾病ニハ殆ンド舌苔ヲ有スルモ必ズ存スト云フヲ出來ズ彼ノ臨床上屢々見ル所ノ胃酸過多症患者ノ如キハ反テ舌ハ鮮紅色ヲ呈ス是レ畢竟胃酸ノ爲洗滌セラル、ニ依ル而シテ今若シ解剖上ヨリ見ンカ舌ニハ分沙腺アリ漿液腺ハ輪廊亂頭及ヒ葉狀乳頭部ニアリ粘液腺ハ舌根舌緣ニアリ混合腺ハ舌端ニ於ケル前舌腺（ヌーン氏腺）ナリ口腔粘膜ニモ又同様ノ諸腺ヲ有ス其外舌根淋巴濾泡ヨリ絶ズ白血球ヲ濾出シ之ガ口腔ニ達シ唾

液ニ混シ唾液ニ体粘液小体トナル如斯諸腺モ又舌苔ニ關係ナシトセズ特ニ是等諸腺ハ蛋白質粘液質等分沙シ且ツ唾液中ニハ「プテアリン」ナル醱酵素アリテ澱粉ヲ砂糖ニ變ズル働ヲ有ス是ニ於テカ口腔中ノ化學的作用モ亦以テ舌苔ヲ説明スルノ一材料タラン余ハ兎角舌苔ノ起ルハ甚ダ複雑ナル原理ニ基ク者ニ或ハ微菌說或ハ化學作用、熱作用等ガ最モ主ナル關係ヲ有スナラント信ズ

◎脚氣ノ一奇妙ナル治療ニ就テ

本病ハ末梢神經ニ於ケル變性的炎症ニ由テ起ル一種ノ傳染病ニシテ我日本ニ本病ノ多キ事他ニ其比ヲ見ズ歐洲各國ニハ之ニ類似ナル疾病アルモ日本及ビ亞佛利加前后印度等ニ於ケル脚氣ト其趣ヲ異スト云フハ洋行セラレシ諸先生ヨリ度々耳ニスル所ナリ而シテ大學ニ長ク教鞭ヲ探ラレシ「ベルツ」氏ハ特ニ日本ニ於ケル脚氣ニ就キ大ニ研究セラレタリ吾人ハ本病患者ノ至テ其數ノ多キ事ハヨク知ル所ニテ俗人ト雖モ其主ナル症狀ニテ脚氣ト云フ診斷ヲナスニ苦マザル位ナリ嗚呼今日ノ醫界ニシテ脚氣ナル

而モ將來國家有爲ノ人ナル學生ヲ主ニ犯ス所ノ此病魔ヲ治療シ得ザルハ畢竟治療藥ナキニアラズシテ其病原明ナラザル爲ナリ余ハ其治療藥アル例ニ遭遇セリ因テ諸君ハ余ガ茲ニ示ス治療藥ヨリ脚氣ノ病原ヲ思考シタランニハ亦興味ナキニアラズ

古來ヨリ脚氣病原ニ至リテハ諸大家其說ヲ異ニシ「ゲルプケ」氏ハ不良ナル米穀ニ基シ「柳ドクトル」ハ一定地方ノ米ニ其原因アリト稱シ近頃三浦氏ハ青魚ニ一種ノ毒アリテ之ガ爲起ルナリト云ヘリ又流行ノ点ヨリ見テ以テ微菌說ヲ主張スル者アリ如斯病原一定セザルヲ以テ其療法ニ至リテハ唯對稱的療法ニ過ズノ決シテ根治スル事アラズ余ハ或ハ一種ノ「ギフト」毒ニテ而モ「ゲルプケ」氏ノ米穀說ニ大ニ賛成ス諸君三浦氏ノ脚氣病論ヲ讀マバ彼ノ麥飯ヲ用タル統計表ガ示ス結果ニテ一見脚氣病毒ハ白米中ニ存シ麥飯中ニ其病毒ヲ中和セシムル一種ノ抗毒素アラントノ想像說起ルナラン一昨々年ノ事我が親友ニテ脚氣衝心ヲ以テ死亡セシ時或ル人ヨリ脚氣衝心ニテ死セントス

ル患者ニ向テ鳥黏(Vogelleim)ヲ丸藥トシ(粘着力アルヲ以テ砂糖ノ如キ粉ヲ以テ包ム三錢ノ價量ヲ服藥セシメ直チニ治セシ三例ヲ示セリ是レ民間ノ平凡ナル說ニノ全ク信ヲ置クニ足ラズト雖モ又以テ麥飯說ニ對稱シ思考シタランニハ甚ダ價アル金言至言ナリトス即チ鳥黏ハ麥ヨリ製セシ者ナルヲ以テ甚ダ興味アル事トシ大ニ鳥黏ヲ分析シテ其一種ノ「アンチトキシシン」ヲ發見シタランニハ實ニ一大變化ヲ來サン夫レ又脚氣患者ニ對シ若シ黏有毒ナカリセバ盛ニ黏ヲ與ヒ以テ統計表ヲ得ルヲ又必要ナラズヤ

◎Babinskischer Reflet.

此反射ハ趾現象トテ「バビンスキー」氏ノ初メテ發見セシ一種ノ足蹠反射ナリ此反射ハ錐狀體(Pyramiden)ノ疾病ニ特發スル一症候ニテ此錐狀體ハ解剖上方向ヲ異ニスル五種類ノ運動知覺神經纖維ノ通ル部位ナリ胎兒九ヶ月ニ至ラザレバ全ク此錐狀體發育セズト夫故ニ初生兒ノ足蹠ヲ刺戟スル時ハ足蹠ヲ展伸スルヲ見ルト是畢竟錐狀體部發育不完全ハ疾病アルト同様ナレバナリ此頃醫事新聞ニ

此趾現象ノ事ヲ細密ニ記載シアリ余ハ臨床上脊髓炎患者ニ趾現象ノ著シキヲ見タリ趾現象ヲ見ル時ハ打診槌ノ柄ノ如キ者ニテ足蹠ノ内側ヲ下方ヨリ上方ニ向テ強ク撫シ或ハ擦過スル時ハ大趾及ビ四趾ハ伸展ス而シテ趾現象ハ錐狀體線路ノ疾患ニハ必ず發スルト云フ事出來ズ又發セザル者アリ反テ屈曲スル事アリト云フ健康體ニ於テハ趾ハ屈曲シテ展伸スル事ナシ兎角此「バビンスキー」氏ノ現象ハ錐狀體疾病ナル一症候ニシテ特ニ器質的半身不隨ト感能的半身不隨等トヲ區別スルニ必要ナル点ナラン

◎腸管ノ寄生虫診斷ノ注意

腸管ノ寄生虫ト申サバ必ずヤ蟯虫蛔虫十二指腸虫、蟯虫鞭虫等ニ注意セラル可シ臨牀上必要ナルハ蟯虫蛔虫十二指腸虫ニシテ他ノ寄生虫ニアリテハ別ニ人身体ニ病的ト稱スル程ノ症狀ヲ呈スルコト甚ダ稀ナルヲ以テ臨牀上價値ナキモノトス、而シテ蟯虫ト蛔虫ハ小腸ニ主ニ寄生シ十二指腸虫ハ各ノ如ク十二指腸ニ寄生スルモ空腸回腸ニ寄生セザルナキニアラズ夫故ニ其部位一定ナラズ余ハ消

化器疾病ヲ有スル患者ガ臨牀上胃腸ノ病狀ノミヲ訴エ寄生虫アルヲ云ハザル事ノ場合甚ダ多キヲ實檢ス是レ諸君等モ又常ニ如斯場合ニ遭遇ス可シ實ニ患者ハ胃腸ノ症狀甚シキガ爲其原因ナル寄生虫アルヲ忘ル、ハ當然ノコナリ、夫故ニ醫師タル者必ズ此寄生虫ノ有無ヲ尋問スルヲ忘ルベカラズ

夫レ十二指腸虫ニマレ蛔虫ニマレ蟯虫ニマレ皆腸管ニ寄生スルヲ以テ胃腸加答兒ノ症狀ヲ呈ス今不定ノ貧血或ハ不明ナル腸胃疾病ノ患者アリテ傍腦症狀乃チ眩暈頭痛腫孔散大ト鼻空疲痒ト全身倦怠アル時ハ先ヅ寄生虫ノ疑ヲ置キ檢査スルヲ必要ナリ而シテ以上三種ノ寄生虫何レナカヲ確定センニハ其既往症及ヒ現症ノミニテハ充分ナラズ必ズ糞便檢査ニテ蟯虫片トカ卵子トカヲ檢査セザル可カラズ蟯虫ノ如キハ患者ノ訴ニテ大抵診斷ヲ確定シ得ラルベシ十二脂腸ハ蟯虫ト同シキ病狀ヲ呈スルモ特異トスル諸点ハ進行スル惡性貧血ト心臟ノ變化ナリ如斯十二指腸虫ガ血行器ニ變化ヲ來スハ寄生虫ノ血液吸取ニ依ル

ト稱スレトモ近頃又虫ヨリ發スル毒物ナラレトノ説起レリ此十二指腸虫ハ又他ノ寄生虫ニ比シテ黃胆ヲ起スト多シト雖ニ確徵候ニアラズ蛔虫モ時々寄生スル所ノ虫ニシテ大抵小兒ニ寄生スル事多シト余ハ近頃三十五六才ノ男子ニシテ蟯虫病ニ罹レルヲ見タリ乃チ蟯虫十二指腸虫ト同シク胃腸加答兒症ヲ呈シ腦症鼻孔癢痒ノ感アル患者ニシテ卵ヲ唯一個鏡下ニテ見ルヲ得タルト患者ノ虫ノ白色ニシテ二十五「センチメートル」程ノ虫五六足時々排出セシモノトノ二ツヲ以テ蛔虫ト診斷セリ

以上申セシ如ク蛔虫ニマレ十二指腸虫蟯虫ニマレ其臨牀上現ル、所ノ症狀稍々同様ニシテ別ニ特意ト稱ス可キ点ナシ其鑑別ニ苦ムコアリ余ハ此ニ三種ノ寄生虫ニ就キ細密ナル病症ハ諸君等ノヨク熟知スル所ナルヲ以テ述ベズ唯次ノ三個條ニ注意セラレンコトヲ

(第一) 先ヅ患者アリテ腸胃症狀(寄生虫ハ一般小兒ハ大人ヨリ強ク胃サル)ヲ訴エ來ル時、全身狀態ニ腦症存否ヲヨク檢シ臍圍及腹部一般穿刺樣ノ疼痛時々アルト

申ス時ハヨク其疼痛ノ有様ヲ尋問ス可シ若シ腦症及臍
圍疼痛アリトセバ先ヅ寄生虫ニ頭ヲ傾ケザル可カラズ
(第二)患者其寄生虫ノ大サ色形數等ヲ云フト雖モ必ズヤ
確ニ眞ト云フヲ出來ザルヲ以テ是非トモ如何ナル寄生
虫ナルカラ見ント欲セバ糞便ノ卵子ヲ顯微鏡下ニ於テ
検査ス可シ

(第三)卵検査ハ寄生虫病者ノ最モ確實ナル最モ必要ナル
要件ニシテ是ヲ以テ診斷スルヲ得而シテ其卵子ヲ見ル
ニハ先ヅ「リチ子」油ノ如キ下劑ヲ與ヘ然ル後卵子ノ有
無ヲ検査可シ是レ一ツハ腸管ヲ清潔ニシ一ツハ卵ヲ見
ルノ診斷的ニ必要ナレバナリ

* * * * *

會 報

○叙任及辭令

叙從七位

正八位

永井

源吾

故陸軍三等軍醫正八位 永井 源吾
特旨ヲ以テ位記ヲ追賜セラル

(二月二十四日宮内省)

京都帝國大學醫科大學教授醫學博士 鈴木文太郎
學術上取調ノ爲京都府下及福井兵庫二縣下へ出張ヲ命ス

(六月三十日京都帝國大學)

歩兵第三十五聯隊附陸軍三等軍醫

竹下麗太郎

免本職補大坂衛戍病院附

(七月二日陸軍省)

陸軍高等官三等

金澤醫學專門學校
教授正六位勳六等

櫻井小平太

(七月十五日內閣)

叙正八位

早瀬 三求

叙正八位

佐伯 亮齊

叙正八位

高多 久正

(七月十六日宮内省)

叙勳六等瑞寶章

村田太次郎

明治三十三年清國事變ニ於ケル功ニ依リ勳六等瑞寶章ヲ

授ケ賜フ

(七月二十八日賞勳局)

金澤醫學專門學校教授

金子 治郎

解剖學研究ノ爲メ滿二年間獨國へ留學ヲ命ス

(八月一日文部省)

第十全會雜誌第二十五號

山口縣へ出張ヲ命ス

(八月二日內務省)

內務技師

野田 忠廣

出京ヲ命ス

京都帝國大學醫科大學教授醫學博士

鈴木文太郎

石川縣鹿島郡豐田尋常高等小學校醫ヲ囑託ス

年手當金拾貳圓給與

石川縣鹿島郡土小尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

(八月六日石川縣)

高澤 甚作

大分縣へ出張ヲ命ス

(八月十二日內務省)

內務技師

野田 忠廣

石川縣鳳至郡諸岡尋常小學校醫ヲ囑託ス

年手當金拾貳圓給與

(八月十二日石川縣)

酒井 政吉

陸軍野戰砲兵射擊學校附陸軍一等軍醫

笠間 太作

免本職補臺灣守備步兵第九大隊附

(八月二十六日陸軍省)

東京衛戍病院附陸軍三等軍醫

關口通太郎

免本職補臺南衛戍病院附

步兵第七聯隊附陸軍一等軍醫

岩田 一

免本職東京帝國大學院入學被仰付

(八月二十八日陸軍省)

免本職補臺中衛戍病院附

(八月三十日陸軍省)

歩兵第三十六聯隊附陸軍二等軍醫

松浦 啓三

免兼官

金澤醫學專門學校助教
兼第四高等學校助教

福見常太郎

免本官專任第四高等學校助教

(八月三十一日文部省)

金澤醫學專門學校助教
兼第四高等學校助教

宮川 爲三

依願囑託ヲ解ク

(八月三十一日本校)

講師

岩田 一

兼鎮北乘組被免

(九月一日海軍省)

海軍兵學校附海軍大軍醫

鈴木寛之助

講師ヲ囑託ス

講師

小西 俊三

虎列刺病豫防健康診斷委員ヲ命ス

雇

岡島 敬治

醫學科第四年級長ヲ命ス

教授

大西 克孝

醫學科第三年級長ヲ命ス

教授

下平 用彩

醫學科第二年級長ヲ命ス

教授

上田 計二

醫學科第一年級長ヲ命ス

教授

石川 喜直

醫學科第三年級長ヲ命ス

教授

櫻井小平太

醫學科第二年級長ヲ命ス

教授

高山 基重

藥學科第一年級長ヲ命ス

助教授

林 常雄

物品檢閱委員ヲ命ス

(以上九月十日本校)

教授 大西 克孝

助教授 林 常雄

助教授 松田 菊治

舞鶴要塞砲兵大隊附兼舞鶴衛戍病院長陸軍一等軍醫 野口詮太郎

免本職並兼職步兵第七聯隊附三等軍醫正職務心得被仰付

(九月十三日陸軍省)

陸叙高等官六等 千葉醫學專門學校教授從七位 敷波重次郎

(九月十五日内閣)

講師ヲ囑託ス 小林 茂

(九月十六日本校)

講師ヲ囑託ス 東 良平

(九月十九日本校)

内務技師 野田 忠廣

石川縣富山縣福井縣三重縣へ出張ヲ命ス

(九月二十日内務省)

石川縣河北郡森本高第小學校醫 森川 修

石川縣河北郡百坂尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

年手當金六圓給與

(九月二十五日石川縣)

金澤衛戍病院附陸軍二等軍醫 小林 茂

免本職野戰砲兵第九聯隊附一等軍醫職務心得被仰付

(九月二十九日陸軍省)

眼科學教務ヲ囑託ス

(九月二十九日本校)

林 義輔

臺灣總督府醫院醫員兼臺灣總督府海港檢疫官正七位 高柳元六郎

陸叙高等官五等

(九月三十日内閣)

石川縣河北郡森下高等小學校醫 森川 修

石川縣河北郡宮野尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

年手當金六圓給與

石川縣河北郡土子原尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

年手當金六圓給與

石川縣河北郡竹又尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

年手當金六圓給與

(十月二日石川縣)

任海軍中軍醫 海軍少軍醫正八位 武田 正壽

任海軍中軍醫 海軍少軍醫正八位 大西 瀨治

(十月六日内閣)

神奈川縣へ出張ヲ命ス 内務技師 野田 忠廣

(十月十一日内務省)

石川縣鹿島郡豐田尋常高等小學校醫 高澤 甚作

石川縣鹿島郡熊木尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

年手當金拾貳圓給與

(十月十三日石川縣)

石川縣河北郡牧山尋常小學校醫 安宅 治六

石川縣河北郡不動寺尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

年手當金六圓給與

石川縣河北郡福昌尋常小學校醫兼務ヲ囑託ス

年手當金四圓給與

(十月二十日石川縣)

石川縣金澤病院醫員 北川 健三

依願職務ヲ免ス

(十月二十三日石川縣)

吉田 幡誠

石川縣金澤病院醫員ヲ命ス

月俸金貳拾五圓給與

(十月二十九日石川縣)

內務技師 野田 忠廣

愛知縣京都府兵庫縣廣島縣山口縣福岡縣佐賀縣熊本縣

出張ヲ命ス

(十一月四日內務省)

石川縣金澤病院醫員 宮井 勇

依願職務ヲ免ス

(十一月十二日石川縣)

吉住 保

熊澤 清隆

皮膚病學及花柳病學副手ヲ命ス(無給)

細菌學副手ヲ命ス(無給)

(十一月十二日本校)

靜岡縣へ出張ヲ命ス

(十一月十四日內務省)

內務技師 野田 忠廣

任陸軍三等軍醫正 陸軍一等軍醫正七位勳五等

野口詮太郎

任陸軍一等軍醫

陸軍二等軍醫從七位

小林 茂

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正六位

國分 金城

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

安村 順吉

任陸軍二等軍醫

陸軍三等軍醫正八位

橋本監次郎

(十一月十五日內閣)

陸軍三等軍醫正

野口詮太郎

補歩兵第七聯隊附

陸軍一等軍醫

小林 茂

補野戰砲兵第九聯隊附

歩兵第四十聯隊附陸軍二等軍醫

安村 順吉

免本職補第十師團軍醫部部員

歩兵第二十六聯隊附陸軍二等軍醫

橋本監次郎

免本職補第九師團軍醫部部員

大坂衛戍病院附陸軍三等軍醫

竹下麗三郎

免本職補下ノ關要塞砲兵聯隊附

(十一月十五日陸軍省)

產科學及婦人科學副手ヲ命ス(無給)

谷口 長松

内科學副手ヲ命ス(無給)
内科學及兒科學副手ヲ命ス(無給)

鎌田勘之助
春日 健治

(十一月十九日本校)

○會員動靜

▲岩田講師 生理學を擔當せられたる同氏は陸軍省の命に應じ耳鼻咽喉科研究の爲め大學院へ入學せられたり

▲小林茂氏 陸軍二等軍醫々學士小林茂は本學年より本校講師を囑托せられ生理學を擔當せらる

▲小西俊三氏 特別會員たる同氏は本校講師を囑托せられ病理學を擔任せらる

▲東良平氏 特別會員なる同氏は本校講師を囑托せられ解剖學を擔任せらる

▲宮川助教 本校体操科の教鞭をとられたる同助教授は本學年より第四高等學校の同科を專任せらる生等今や先生と分かる師恩忘る可らざるものあるを多謝す

▲福見助教 本學年より第四高等學校との兼任を解かれ本校の專任を命せられたり

▲杉本悦敏氏 金澤市止善堂病院に奉職せられたる同特別會員は病氣の爲め歸郷せられて目下靜養中の由

▲高岡高勝氏 自宅開業中の同特別會員は九月十六日廣島縣檢疫官と命ぜられたり

○在京會員移動

(松原三郎君より通信)

▲久津木勝作君 外科介補を辭して内科介補に移り入澤教授の下に研究中

▲河野勇君 先頃上京せられて婦人科及梅科研究中

▲酒井佐太郎君 先頃上京せられて隔日毎大學及び永樂病院にて外科研究中

▲田中秀夫君 一年志願兵滿期后永樂病院外科奉職中

▲辻岡律君 吉原病院を辭し吉原にて開業せられたり

▲廣野喜久雄君 吉原病院奉職中

▲笠間大作君 金澤三十五聯隊へ轉任せられたる筈なり

○新入生諸君を迎む

家庭はいやましに大となりぬ、遊ばんかな百餘の新しき

はらからよ、大母ヒボクラ―テスガ乳のしたゝりはつくべくもあらず、こがね波うつゝの髪にわれ攀ぢばや。(忠)

○卒業生諸君を送る

六十の諸兄、今や業を卒へ平生希望して止まざりし雄飛活動するの日は來れり、兄等が得意懷ふ可きなり、後進の余等何う二言の送辭なきを得んや。

然れども、聞く何人も一度校門を出づるや、始めて人世の複雑なるに眩惑せざるを得ずと、兄等一教導者なきの今、果して順流に一路水平帆揚ぐるの寵兒たるを得るか、果して流行不遇の泣事兒に修るなきか、初陣の兄等よ、わが先輩に幾多の悲しき失敗者を出せり、兄等乞ふ再び其の患を演ずる勿れ、是れ後進の余等袖を牽いて呈するの言とす。

わが先輩のあるものは遂に不遇に終れり。

ろも不遇の原因は、一は學統の異なるに向つて一種の編狭の心は互ひに疊を設け、或は敬遠主義、或は繼子的の冷遇を受くると、一は亦社會一般の不秩序勞働に對するの

報酬の不權術、其の嗜好の卑しき、理想の低き之なりとは雖も、亦年少徒らに氣英なる、夫の處世法を省みず自ら逆流に棹するとの少しとせず、嘆するもの、言悉く是か、社會常に無情なるか、蓋し疑問なり、それ醫の世に處するや凡ての階級に接せざる可らず、殊ゝ病者は過悔となりわが一居一動一言一句感ふ感情を上下し、引いては疾病の經過、豫後に變動を來すなきに非ず、醫の行路亦至難と謂ふ可きなり、宜しく人情の機微を解し世間の實相を明にせざる可らず、然れどもわが先輩のあるものは遂に社會の心的奴隸となれり。

一度社會の門戸に入るや、遂に溷濁せる暗潮中の人となり、世俗趣味を迎合するに汲々として、行爲に一の熱誠なく、眞摯の態度なき形成的の親切心をほのめかす、是れ俗界に入りて未だ超脱するを知らざる輩のみ。

わが先輩のあるものは眠れり。

彼卒業の榮を擔ふや、意氣軒昇、恰も臥竜の雲霧を得て將に乗ぜんとするの活觀ありしも、心意活動の波長甚だ

短く忽ちにして大風吹き熄んで軒坤再び死滅の沈靜に歸し、只平々坦々たる行路に寂として聲を收め、歡樂見事として安逸を求むるの外なく前世紀の老漢方醫と伍を同ふするとは、躰溫の急變も亦甚しからずや、あるものは云はん漸く練滑を得たりと、さてくお目出度い哉。先輩のあるものは拜金の子となれり。

元より封建世祿の時代と異り、何人とも雖も糊口の策を求むるは論なきも、拜金の人、何か故に初めより商業を修めざるしかを疑ふて止まざるなり、蓋し氣魄に乏しきが爲めか、然り彼等稍々生計を得るに至らば即ち碌々日を送り學習の研習を省みず、患者に冷淡に、恰も死水動かぬ盆池の如く、やがて眠らんとするものなり、噫、彼等何を以て世人の豫望に答へんとするか、愉安逸樂を擅にするは吾人の耻辱にして心事陋劣なるを憐まざるを得ず。安逸のあるものは功名を急ぎて失敗せり。

烟笑す可きに功名心、可憐なる小名譽心とにかられ遂に失敗に終れる彼等は、其の名譽功名心を正路に誘導して、

蓄積と修養を精勵し他日の踊躍を企つを知らざりき、其の器々の極果して何物ありしか。

先輩のあるものは同窓の親睦を忘れたり。

生れし學校、十全會も何時か彼等の會頭を去れり、内に幾多の實驗研究を齎すも尙本誌に報じ余等を示導せざりき、彼等は快樂和合の家庭に協心同力學に忠なるを知らざりき。

今や念慕の情に堪へざる兄等と神を別たんとす、兄等幸に先輩のあるものを摸する勿れ、兄等が背負ふ天職を忘る勿れ、是れ苦言か不禮か、送別の辭に替ふるは或は當を欠かん然れども兄等とて校内に在るの日同く一度は此の感を抱きたる可く、内に在るものゝ外を懷ふは人情の然らしむる所にして余等亦今之を踐むのみ、兄等些々たる失敗に蹉跌するなく、天分を守つて醫界に貢獻あらん事を希ふの轉た切ならずんばあらず、切情の言却て感情を害する所あらばか、最も近く卒業せし兄等は最も能く余等の心中を知るもの幸に寛恕あれ。

終りに兄等の健康を祈り、本誌は日々其の消息を研究の報告を待つものなり。(忠)

○本校規則の改正

本校には本學年より規則中左の改正實施せられたり

第三條醫學科學科課程并ニ藥學科學科課程表各備考欄内ニ別項トシテ「獨逸語授業ハ英語ヲ以テ入學シタル

者ニ本表規程ノ時數ヲ課シ獨逸語ヲ以テ入學シタル者

ニハ都合ニ依リ四學年ヲ通シ毎週二時間ヲ課ス」ヲ加フ

第六條ニ一月「九」日トアルヲ「八」日ニ改ム

第七條冬季休業一月「八」日トアルヲ「七」日ニ改ム

第十二條中「兼テ体格検査ヲ施シ」トアルヲ削リ別ニ第

二項トシテ本條并ニ第十條第十一條ノ場合モ体格検査

ヲ施行ス」ヲ加フ

第十五條證明書式中「本校卒業生ニシテ品行方正身体

健康ノ者ニ有之候此段」トアルヲ「金澤醫學專門學校

醫(藥)學科入學志願ニ付頭書ノ事實」ニ改ム

第十八條「願ニ依リ退學セシ者」トアルヲ「退學又ハ除名ノ者ニシテ」ニ改ム

第二十五條「七日以内」トアルヲ「直」ニ改ム

第五十五條中藥學科「金貳拾圓」トアルヲ「金貳拾五圓」

ニ改メ同條第一學期藥學科「金七圓」トアルヲ「金九圓」

ニ第二學期藥學科「金六圓」トアルヲ「金八圓」ニ第三學

期藥學科「金七圓」トアルヲ「金八圓」ニ改ム

第五十八條第一項但書中「該當スル者ニハ」ノ次ニ「第

二學期ヨリ」ヲ加フ

第五十九條「授業料ヲ怠納スルトキハ金澤在住ノ保証

人ヨリ徴収ス」ニ改ム

第六十條ヲ「授業料納附定日後三日ヲ過クルモ尙ホ怠

納ノ者ハ登校ヲ差止ム」ニ改ム

○本會役員 (明治三十五年九月)

會長 高安右人

副會長 木村孝藏

理事 小川勝陳

代議員 小幡 學雄 計見 雄藏 池野 清政

村本 淳吉 中田德次郎 大楠 秀松

金子 精一

書記 永山 一昌 高柳鎌次郎 石黒 重藏

宇野 益之

雜誌部長兼編輯長 下 平 用 彩

全 委員 林 常雄 松田 菊治 中野鑄太郎

佐々木辰實 諸橋嘉久治 有壁 一雄

上野 忠 渡邊 疆 中村 德藏

木村松三郎 岩佐 兵藏 高森萬次郎

臼井 太郎 金 堂 圓

講話部長 佐々木 達

全 委員 湯目 隆漬 石田 伍佐 加藤 寛

林 篤 伊藤 顯德 佐々木純一郎

谷澤 一郎 藤井 保二 杉部多米吉

林 京次郎 村澤 金廣 曹根 章

遊技部長 上 田 計 二

全 委員 福見常太郎 太田 友一 林 龍門

楠 正之 久我 龜 熊野 勉造

劍道部長 大 西 克 孝

全 師範 石 川 龍 三

全 委員 永江 直之 小原德太郎 水上 俊三

石橋 三也 森 茂

柔術部長 石 川 喜 直

全 師範 吉 村 新 六

全 委員 根守 政規 三股 梅吉 山田伊之助

高橋 義作 柳 榮太郎 與鳥 山忠

辻 實治

弓術部長 櫻井小平太

全 師範 楠 正 可

全 委員 齊藤 賢德 山本 幹雄 笹田 順三

原 久雄 猪飼 史郎 山崎内藏三

梅津 四郎

○三十四年度十全會費決算報告

三十四年度金澤醫學專門學校十全會々費収支決算別表貳表之通ニ有之候又資金貳百六拾四圓八拾六錢九厘ノ内金拾八圓七拾六錢臨時弓術費ニ支出相成タルニ依リ殘金四拾六圓拾錢九厘之レニ本年度收入増參拾九圓四拾七錢仕拂殘六拾九圓九拾九錢八厘會則第十三條四項ニ依リ資金ニ繰込タルニ由リ現在資金參百五拾五圓五拾七錢也

明治三十四年度金澤醫學專門學校十全會收入決算表

科	目	豫定額	收入濟額	豫定額ニ比シ收入濟額ノ差	備考
經 常 部	第一款 金澤醫學專門學校十全會	六五二、八七七	六九二、三四七	三九、四七〇	
	第一項 特別會員寄附金	一一三、四〇〇	一一三、四〇〇	〇	
	第一目 職員寄付金	一一三、四〇〇	一一三、四〇〇	〇	
	第二項 通常會員會費	五一三、〇〇〇	五四四、〇〇〇	三一、〇〇〇	
	第一目 醫學生會費	四六九、五〇〇	五〇二、五〇〇	三三、〇〇〇	退學者ノ少ナカリシニ依ル
	第二目 藥學生會費	四三、五〇〇	四一、五〇〇	〇	退學者多カリシニ依ル
	第三項 利益金	一七、四七七	二五、九四七	八、四七〇	
	第一目 基金利息	一七、四七七	二二、六六八	五、一九一	
	第二目 雜收入	〇	三、二七九	三、二七九	當年ノ會費ヲ預入セシ利子ヲ加ヘタルニ依ル
臨 常 部	臨時部合計	六五二、八七七	六九二、三四七	三九、四七〇	分離前ニ係ル本會ノ利子殘高等學校ヨリ領収セシニ依ル
第一款 弓術費受入金		一八、七六〇	一八、七六〇	〇	

第十全會雜誌第二十五號

明治三十四年度金澤醫學專門學校十全會支出決算表

科目		原豫定額	△流用 △印増 △減額	豫定現額	支出濟額	不用額	備考
第一項 金澤醫學專門學校十全會		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第一項 講話部		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第一目 大會費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第二目 常會及語學部會費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第三目 臨時會費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第四目 講話材料費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第二項 雜誌部		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第一目 雜誌費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第二目 通信費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第三目 消耗品費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第四目 新開費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第五目 製本費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第六目 雜費		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
第三項 遊技部		一八七六〇	一八七六〇	一八七六〇	〇	〇	
合計		六七一六三七	七二二〇七	三九四七〇	〇	〇	

第十全會雜誌第二十五號

第一目	秋季運動會費	九〇,〇〇〇	△	〇,九六五	八九,〇三五	八五,八三〇	三二,〇五
第二目	春季運動會費	二〇,〇〇〇	〇	〇	二〇,〇〇〇	一九,九九一	〇〇,〇九
第三目	ロンテンス費	二四,〇〇〇	〇	〇,九六五	二四,九六五	二四,九六五	〇
第五目	端艇基金	一〇,〇〇〇	〇	〇	一〇,〇〇〇	〇	一〇,〇〇〇
第四項	劍道部	二五,〇〇〇	〇	〇	二五,〇〇〇	二四,八三四	〇,一六六
第一目	寒稽古獎勵費	一〇,〇〇〇	〇	〇	一〇,〇〇〇	九,九一〇	〇〇,九〇
第二目	春秋大會費	二二,〇〇〇	△	二,一五五	一四,一五五	一四,一五五	〇
第三目	有功賞費	二〇,〇〇〇	△	二〇,〇〇〇	〇	〇	〇
第四目	雜費	一〇,〇〇〇	△	〇,一五五	〇,八四五	〇,七六九	〇〇,七六
第五項	柔道部	二五,〇〇〇	〇	〇	二五,〇〇〇	二四,五五二	〇,四四八
第一目	寒稽古獎勵費	一〇,〇〇〇	△	二,九〇〇	一二,九〇〇	一二,九〇〇	〇
第二目	春秋大會費	二二,〇〇〇	△	二,〇五八	九,九四二	九,九四二	〇
第三目	有功賞費	二〇,〇〇〇	△	〇,〇五二	一,九四八	一,五〇〇	〇,四四八
第四目	雜費	一〇,〇〇〇	△	〇,七九〇	〇,二一〇	〇,二一〇	〇
第六項	弓術	三〇,〇〇〇	△	一,〇六一	三二,〇六一	三二,〇六一	〇
第一目	大會費	一五,〇〇〇	△	〇,一七六	一五,一七六	一五,一七六	〇
第二目	備品費	一,一三四〇	△	一,〇九五	一〇,二四五	一〇,二四五	〇
第三目	雜費	三,六六〇	〇	一,九八〇	五,六四〇	五,六四〇	〇
第七項	會務費	一七,三七八	〇	〇	一七,三七八	一五,一三〇	二,二四八
第一目	備品費	二〇,〇〇〇	〇	〇,二五〇	二二,五〇〇	二二,五〇〇	〇
第二目	印刷費	二〇,〇〇〇	〇	〇	二〇,〇〇〇	一,四〇〇	〇,六〇〇
第三目	消耗品費	八,三七八	△	〇,二五〇	八,一二八	七,四八〇	〇,六四八

第四目 雜費	五〇〇〇	〇	五〇〇〇	四〇〇〇	一〇〇〇
第八項 豫備費	三三、六四四	△	三二、五八三	六〇四〇	二五、五四三
第一目 豫備費	三二、六四四	△	三一、五八三	六〇四〇	二五、五四三
經常部合計	六五、二八七七	〇	六五、二八七七	五八、二八七九	六九、九九八
臨時部					
第一款 弓術費	一八、七六〇	〇	一八、七六〇	一八、七六〇	〇
第一項 弓術費	一八、七六〇	〇	一八、七六〇	一八、七六〇	〇
第一目 弓術費	六〇〇〇	〇	六〇〇〇	六〇〇〇	〇
第二目 南山移築費	六〇六〇	△	七、一〇〇	七、一〇〇	〇
第三目 的場上屋新造費	六七〇〇	△	五、六六〇	五、六七〇	〇
臨時部合計	一八、七六〇	〇	一八、七六〇	一八、七六〇	〇
合計	六七、一六三七	〇	六七、一六三七	六〇、一六三九	六九、九九八

三十四年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員會費決算別表貳葉之通ニ有之候且實收額貳百貳拾貳圓八拾貳錢九厘ヨリ仕拂高百四拾五圓九拾九錢差引殘金七拾六圓八拾參錢九厘之レ則テ翌年度へ繰越額ナリ

但本年度分収入金百四圓貳錢九厘ニ對シ支出額百四拾五圓九拾九錢ナリ因テ差引金四拾壹圓九拾六錢壹厘不足ヲ生シタルハ未納者ノ多キガ故ナリ然レトモ一時ニ五ケ年分納付セシ者有之故該金ヲ以支辨ス尙三十五年度ヨリ三十八年度迄ノ會費既納金百拾八圓八拾錢ニ對シ殘金七拾六圓八拾參錢九厘有之故差引金四拾壹圓九拾六錢壹厘本會ノ負擔ナリ

明治三十四年度金澤醫學專門學校十全會校外特別會員收入決算表

[illegible]

本年度畢業生	本年度前卒業生	合計
二二	三三	二一六
二一〇〇〇	一九二〇〇	一〇三二〇〇
二二	三三	五三
二一〇〇〇	一九二〇〇	四〇二〇〇
二二	三三	五三
二一〇〇〇	一九二〇〇	四〇二〇〇
二二	三三	三三
二一〇〇〇	一九二〇〇	一九二〇〇
二二	三三	三三
二一〇〇〇	一九二〇〇	一九二〇〇

○三十五年度十全會歲入歲出

豫定計算書

歲入之部

科	目	三十五年度豫定額	摘要
第一欸 金澤醫學專門學校十全會	第一項 特別會員寄付金	一一六〇〇	現在職員三十一人一人二付平均年參圓六拾錢
	第二項 通常會員會費	五五九、五〇〇	現在醫學部生三百七十八人一人一割引三百四十人一人二付壹圓五拾錢
	第三項 藥學生會費	五二〇〇〇	現在醫學部生三百七十八人一人一割引三百四十人一人二付壹圓五拾錢
	第四項 藥學生會費	四九、五〇〇	現在醫學部生三百七十八人一人一割引三百四十人一人二付壹圓五拾錢
	第五項 藥學生會費	三三、四六三	現在醫學部生三百七十八人一人一割引三百四十人一人二付壹圓五拾錢
	第六項 藥學生會費	三三、四六三	現在醫學部生三百七十八人一人一割引三百四十人一人二付壹圓五拾錢
合	計	六九四、五六三	百圓二付六步六厘

歲出之部

科	目	原	豫	定	額
第一欸 金澤醫學專門學校十全會	第一項 講 話	六九四、五六三	二五〇〇〇	一五〇〇〇	二五〇〇〇
	第二項 常會及語學部費	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇
	第三項 臨時會費	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇
	第四項 講話材料費	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇
	第五項 語學部大會費	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇
	第六項 雜誌	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇	二五〇〇〇
第二欸 雜 誌	第一目 雜誌	三八一、八八〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇
	第二目 通信	三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇	三三〇〇〇
	第三目 消耗品	七〇〇〇	七〇〇〇	七〇〇〇	七〇〇〇
	第四目 新聞費	一一八八〇	一一八八〇	一一八八〇	一一八八〇

第十全會雜誌第二十五號

第五目 製 本 費	三、〇〇〇
第六目 雜 費	一、〇〇〇
第三項 遊 技 部	一三五、六六〇
第一目 秋季運動會 費	八三、一六〇
第二目 春季運動會 費	二〇、〇〇〇
第三目 ロンテニス 費	二五、五〇〇
第四目 フットボール 費	七、〇〇〇
第四項 紐 道 部	二八、〇〇〇
第一目 寒稽古獎勵 費	二、〇〇〇
第二目 春秋大會 費	一五、〇〇〇
第三目 雜 費	一、〇〇〇
第五項 柔 道 部	二八、〇〇〇
第一目 寒稽古獎勵 費	二、〇〇〇
第二目 春秋大會 費	一五、〇〇〇
第三目 雜 費	一、〇〇〇
第六項 弓 術 部	三六、八〇〇
第一目 大 會 費	一五、〇〇〇
第二目 備 品 費	一八、五〇〇
第三目 雜 費	三、三〇〇
第七項 會 務	二〇、〇〇〇
第一目 備 品 費	二、〇〇〇
第二目 印 刷 費	二、〇〇〇

第三目 消 耗 品 費	八、〇〇〇
第四目 雜 費	五、〇〇〇
第五目 有 功 賞 費	三、〇〇〇
第八項 豫 備 費	三九、二二三
第一目 豫 備 費	三九、二二三
經常 部 合 計	六九四、五六三

第三目 消 耗 品 費	八、〇〇〇
第四目 雜 費	五、〇〇〇
第五目 有 功 賞 費	三、〇〇〇
第八項 豫 備 費	三九、二二三
第一目 豫 備 費	三九、二二三
經常 部 合 計	六九四、五六三

○入學式 九月十一日午前九時本校濟々堂に於て入學式舉行せらる校長高安教授は新入學生を職員并に在學生に紹介せられ次に生徒心得五ヶ條并に其の他注意す可き條々を指導し懇々注意せられたり

○卒業式 十一月十二日午前第十時より本校講堂に於て醫學科第十五回、藥學科第三回の卒業式を舉行せり、定刻に至り來賓諸教官及び卒業生諸氏の着席あるや、御眞影を拜し高安校長勅語奉讀あり、次で校長登壇卒業証書を授與し、校長の告諭、醫學科卒業生惣代加納景成君、藥學科卒業生惣代築山英雄君答辭にて式全く終り、一同へ茶菓の饗應ありたり

因云、今回の卒業生、醫學科は左の五十名、藥學科七名、合計五十七名なり

醫學科

石川 加納 景成	富山 堀井 吉平
新瀉 丸山 六郎	富山 堀内 信吉
富山 野嶽 利七	秋田 鎌田 勘之助
千葉 鈴木 重吉	石川 島 誠 郁
富山 土田 久三郎	石川 増田 貞吉
福井 宮越 常次郎	石川 松 村 魁
石川 八田 智証	富山 齊藤 義雄
福井 尾倉 一英	新瀉 井口 正察
石川 福岡 嘉洋	福井 林 正 雄
福井 石 黒 均 造	長野 小岩井 長四郎
新瀉 小山 庄 治	愛知 辻村 耕 丈
埼玉 都築 熊藏	石川 清水 秀 夫
愛知 藤 浪 謙	富山 鷲山 他三郎
長野 高田 重 忠	富山 横井 嘉 亟

藥學科

大坂 森岡 惣太郎	新瀉 伊野宮 長 民
石川 熊澤 清隆	愛媛 柔 折 直
福井 春日 健治	石川 三野 賢 吉
廣島 平田 一若	福井 富田 稔 啓
石川 太田 長作	三重 片 岡 正
富山 高田 文齊	新瀉 芳野 林 翁
岡山 藤原 敏夫	富山 牧 良 一
石川 吉住 保	石川 谷口 長 松
鳥取 原田 正廣	富山 片山 良 作
石川 井原 悟	岡山 中元 長三郎
新瀉 佐藤 芳太郎	富山 米澤 恭 次
藥學科	
熊本 築山 秀雄	富山 棚田 佐 吉
石川 小原 貢	石川 新 次 郎
熊本 宮川 一雄	富山 長崎 謙 治
石川 赤土 佐 一	
以上	

○金子教授の留學及送別會

八月一日付を以て解剖學研究の爲め獨逸國に留學を命ぜられたる本校教授金子治郎氏は全月二十五日を以て當地を出發せられたり、これより先全月廿三日教授の指導を受けし受験生一同は本校組織實習室に於て送別會を開き又本校職員并に金澤病院醫員も全日鏝甚樓に於て送別會開催せり

○第廿七回講話會報告

天高ふして思ひは蒼穹の彼方に遠く、氣は自ら澄み渡りて雜念頓ふ滅了するの時諸子崇高の想は凝て、玆に講話會第廿七回開會を生み出したりとは雖とも、諸子は又委員諸君の斡旋の勞多かりしを謝せざる可からず、十月二十五日午後六時二十五分内科教室に於て開會、佐々本部長登壇、再選の辭及び本會の獎勵法を説かれ、併せて元來本會の附屬たりし語學部を廢し、語學研究上却て級會に附屬するの可なることを述べられたり。

第一席、直線と曲線、釜口長助君、氏は心理的より直線

と曲線を解釋せられ、人生の行路を以て譬諭し良く障礙に打勝ちし成劍の人を以て直線の行路を取りし人とし其才法手段として校にありては校則を重んじ居にありては研學の餘「バイブル」研究の最適切なる事を絶對的に論せられたり。

第二席、五管器感能の本原は何れにありや、林龍門氏は五管器中樞以外に悟性なるもの、存在を詳細講述せられたり、然し氏の説たる醫學的範圍を脱して心理的立案あらざる乎、妄言多罪。

第三席、和合の話、村上教授、先生は得意の諷刺的語調を以て凡ての事業上、學問上和合の一大要素なる彼の二十三年十月三十日日本臣民に賜はりし教育勅語の夫婦の和、朋友の信より解かれ延て「ファミリー」の和、一村一郷一國、世界の和に波及し、本會も時と所と演者聽者の四者の和にて成立し學生も自己の勉強心、身体の健全、學費の三要素の和によりて成立し、十全會は諸部の和、學校は學生教師の和、其他百般の事皆和なくして成立す

るものなく吾人の体と雖とも生理的の和なくんば健全を保する能はず況んや精神をや學問上に於ても然り畢竟諸事と合なくんは破滅す、破滅と雖とも和せは成立すと説き來り説き去り漸く佳境に入られとする時刻限時間の爲め降壇せられしは遺憾なりし。

第四席、疑問、井上只次君、氏は疑問なる問題の下に現時諸人士の胸中公徳心の存在如何を述べられたり。

第五席、原發性膀胱癌に就て、小西講師、膀胱に發する腫瘍殊に癌腫の統計、發生年令、男女の統計、膀胱に於ける發生部位を詳細に報告せられ次て組織的顯微鏡的に其癌腫の種類及び慢延區域、此の轉歸、續發的作用障碍及び併發症より延ひて臨床上の症候に論述せられ終に臨みて胃癌との鑑別診斷を詳細説かれしは諸子の講師に深く謝する所なり。

第六席、ニューヘロイツウム、猪飼史郎君、氏は「カーラエル」より惹き來りて「ヘロイツウム」を解釋し吾人に向て古來凡ての英雄が有せる各博異崇高なる思想を總括

する理想的大英雄を崇拜するの研學卒業の一大示針なることを論せられたり。

第七席、細菌の鞭毛染色法に就て、上田敎授、抑も鞭毛染色法は古來學生の大に困難とする所なるが爾來先生は一意之が方法を研究せられ其の結果從來のものより容易になし得る事を報告せられたり。

本來鞭毛は極めて至微なるのみならず鞭毛は蛋白質を有する事少く却て主に植物性纖維素より成る然るに一般細菌染色法としては鹽基性「アニリン」色素即ち「フクシン」「ゲンチアナヒフレット」等を用ゆるも該色素は蛋白質及び之れに類似の物質は染色するも植物性纖維素を染色し得ず故に一定の媒染藥の必用を感じたり本來細菌媒染色は種々あるも從來「タンニン」酸に金屬鹽を加へたるものを最とす則ち此物沈澱して鞭毛に附着せしめざる可からず其の第一法として「ギヨッセル」氏は「タンニン」酸に硫酸鐵を加へしもの(即ち「アイゼンタンナート」)、中に細菌を侵漬せり然し該法は其の加減困難なるのみならず室

溫にては五時間を要し増溫しても尙一乃至一、五時間を要する故に學生實習上大に不利益なり且つ増溫せんか「タンニン」酸は「グラス」に附着し視野朦朧たるを免れず然るに所謂新法にてなさんか僅々一二分にて彼の諸子の染色に最も苦心する「コレラ」菌の鞭毛と雖とも容易に染色し得即ち媒染法としては「バツプレル」氏法にして二液を要す其の第一液として「クローム」酸(純粹のもの痕跡の硫酸ありても染色不充分なり)二、五立方仙迷蒸溜水一〇〇、立方仙迷第二液としては「タンニン」二〇、立方仙迷蒸溜水八〇、立方仙迷なり今第二液を溫め全く溶解するを待ち此の全量に第一液一五、立方仙迷を加へ攝氏二〇度に四日乃至六日間次に同溫度にて充分に漏過し同溫にて貯藏し同溫にて使用す然る時は僅々一二分にて成功すと雖とも二〇度に些少の變動あるも不可なり故に此の同溫に保するの困難なるより予(先生)は之を改良せり本來第二液に第一液を加ふれば「クローム」酸と「タンニン」化合して「クローム」酸「タンニン」なる不溶解物を生

ず然して此物は攝氏二〇度の方に於て溶解し溫低ければ沈澱し高ければ「クローム」酸の酸化作用により鞭毛を傷く故に予は種々なる試験をなして漸く其の「クローム」酸「タンニン」の量を増加するの必要を認めたり故に試に第二液八〇、立方仙迷に對し第一液三〇、立方仙迷を加へしもの及び五〇、立方仙迷を加へしものを以て使用せしに后者を四五日間放置し漏過して使用せしに二十乃至二十四度何れにても明に染色す尙詳細は期日報告せんも畢竟其利益なるは溫度の關係なき事短時間にて試し得る事明かに染色する事標本は清潔美麗なる事なりと述べられたり。

第八席、神經系統検査法に就て、眞柄佐一郎君、氏は神經系統検査法の大に困難なる事然れ又多趣味なる事及び之が方法を述べられ且つ半身不隨症は僧帽辨の合閉不全及失語症を合併する患者に就て其の内腦出血か又は栓塞により起るものにて両者の鑑別を明にし其の僧帽辨の合閉不全の爲め腦内に栓塞を來せしに起因する事を詳細説

明せられたり。

九時四十五分佐々木部長直は閉會の辭を述べられ次て散會、來會者の主なるものは高安校長、小川、佐々木、村上、上田、石川各教授、小西、東の二講師、醫員數名、學生三百人垂んとしき、附記す當日は大西教授の「アンチトキシ」に就てなる演題ありしも教授は中途病症の爲め歸宅せられしは吾人の遺憾とする所なり（有、一、生報）。

○秋氣運動會

大廈高樓は基礎の堅牢に由りて千載の宏麗を存し、霸業雄圖は籌策の深遠を以て萬代芳名を垂る、未だ大廈高樓を空に架し雄圖大業の一旦に企圖せるを聞かす、抑も天下何事か終りありて始めならざるものあらんや本立に而して後未見はる、是を以て一日の素養は尙能く一日の好果を収め二日の素養は則ち二日の功績を成す。

醜て之を刻下に見るに世人多く方今青年の意氣消沈を嘆ず吾人敢て然らずとせず今や上に德行なく下に敬意を見ず惰風磅礴として奢者權を弄し民利に赴き世を擧げて然

らしめんとす青年の屢々過つ趨勢の止を得ざるにあらざるか、看よ夫の世に幾多の青年笈を負ふて學問に集る者其の幾分なるを知らず而して其始め鄉關を出づるや皆青雲の念胸裏に鬱勃たらざるなし而かも身を紅塵萬丈の裡に投ずるや恰かも氷雪の春陽に遇ふが如く年來の意氣氷解一個泛々の輕薄子となり舞踏殿裡に春色を漁し爐邊酒を煖めて解語の花を弄し僅々一二の詩文を得ては以て儼珠を得たりと爲し人生最要の時機を空しく醉生夢死の間に送るもの多きとあらずや適々勵精の徒あるも必竟書中の紙魚隆觀尖顛到底國家紹嗣の器にあらず、抑も青年は人生の春にして國民の花國家の氣なり、古人曰く居は氣を移すとは是れ都門輕俳の俗滔滔たる青年を驅て茲に至らしむると雖とも青年其の人の克己心欠乏に起因せずんばあらざるなり元よりは是れ一即一端なりとするも推して以て全豹を窺はし滔々たる青年者流の痼疾正ま如何の程度に進行しあるやを想察するも難からざるべし今にして挽回の策を講せずんば混純たる濁流は彼れか心胸を浸し去

り到底醫すべからざるの大患に至らむ、世人多くは罪を青年に歸し未だ之が救治策を講せず、議者或は校規を嚴よして之を督す然れども是れ徒ら末を議して元を後よするの謬なるなからんか嗚呼あさましの世や苟も二十世紀の大舞台に絶叫し國民の花を以て自任する青年よして他の監督の筈の下に立たずんば自ら徳利を持するあたはざるか！否な！吾人自ら其の痼疾を去る名術あり議するものあり曰く今や文運隆盛各地方社を立て會を設け文を以て友を集むる者其數頗る多し故に各社に激して志を同ふる者を求め相連絡せしめ文を講し學を研くの傍勉めて精神の練磨を積み戒惡勸善直言忌まず抉摘憚らず以て淫靡の風習をして一掃せしめ花實兼備文質彬彬の名士を涵養するに在り夫れ全國協心同力孜孜として事に従ふ有らば期年よして大に青年の風習を一廓し凛々の氣概をして蹶起せしむること首を翹て待つべきなり且つ文運の盛衰は氣運の汚隆に關す蓋し意志なる者は文章の根柢にして辭句は真情の流露なればなり故に氣運隆々青年の元氣

旺勃たらは絶大の文豪亦必ずや頻々として輩出し以て國家の盛を鳴らす者ある事疑ひを容れざるなりと方今獎學の舉天下に沿ねく文質彬彬の士を涵養するの道完備せるに世人多くは文學を目して懦弱者流の嗜好となし結果却て此痼疾を見る識らずや小詩マルセーユは如何に佛國青年を鼓舞せし獨逸今日の隆盛は熱誠一篇の句に起因せしにあらずや我國現時文に志すもの濟々多士と雖とも未だ青年鼓舞の國歌なし吁！余憶に青年の意氣既に此の如し之れを根本的に一掃するにありと雖も事空論に奔りて捕へ難し若かす同志結社の益あらんには然れども此策文辭を弄する僅々一部の青年に止まりて到底一般青年の痼疾を一掃し得るや保し難し要て精神的修養なり宇宙は廣し徒に相對し憂々として塵埃の裡に爭はんより樓上不消化の文學に耽らんより吾人は寧ろ青天井の下靈妙なる自然の賜寶に浴せんと欲するもの又以精美なる士氣を涵養するに足らんか、一笠一鞋以て山川を跋涉し蜀嶮の險大行の難以て心魂を練鍛し奇寒砭骨の寒風酷熱鏖金の暑天益

斯風を琢磨す可し譬半日の旅一日の行と雖ども自然の秘美吾人の琴線に觸れては發して浩然の氣となり凝て崇高の文となる加るに歴史地理人情風俗の如何を觀察研究する亦多趣味なるなからんか、高潔の志操を逞ふせんとする士よ飄々たる蝴蝶徒に黃花紅葉に眷戀たらんよりは寧ろ黒毛不文の鴉となりて反哺の孝を學べ若鷗となりて彩籠に美人の愛を貪らんよりは寧ろ大鵬となりて翼垂天の雲の如くなるべし。

我校遊技部は歲々遠足會を催し以て吾人をして蒼々たる高天の下廣漠たる原野の間書窓鬱屈の氣を伸ぶるを得せしむるは必竟吾人をして身体を強壯ならしめ他日の資を養成するに他ならず、時恰も晩秋金颺漸瀝として早寒郊墟に入獵集氣力を養ふ正に是れ燕趙悲歌の士が劍を按し腕に枕して其偉大なる素懷を述へ痛快なる卓論を吐て滿腔の熱血迸發せんとするの時たり見渡せば前嶺後岳霜露慘憺として枯葉地を捲き風物悽又寂轉た壯士の肝膽を寒からしむ嗚呼何等の好時機ぞ天涯の遊士我れ煙霞の痼癖

勃々として禁ずる能はず恰もよし我遊技部は小松片山津間長距離(約三里)競争を催し士氣を鼓舞せんとして檄を飛ばし同志と募る、十一月二日黎明飛雨蕭々として濛々金澤停車場に集合す夜來晴陰定らず行雲月を蔽ふこと數々余大に危む午前五時號砲を聞く乃ち輕裝鞋を踏て停車場に向ふ既にして飛雨蕭々として來り四顧濛々として冥塞し峰影模糊として虬蛇に髣髴たり蹢躅逡巡午前七時我校の健兒集るもの二百余七時三十分蛇背を借りて小松に向ふ列車徐行し松任に至頃ひ黒雲漸く天を蔽ひ來り驀然風伯雨師暴威を鼓して車窓を衝く然れども競技者勇氣頓に進み朦朧の間万項の田圃岳陵起伏の景を賞して快乎を叫び一瞬毎に轉變する光景誠に書窓の苦を洗ふに足る一行快談笑聲時々窓外に溢れ吟聲放歌相次て起る東の美川を過るを知らず九時二十分小松に着す衆皆下車競争の準備をなす此行予先發として行き審査掛を命ぜられ根守氏と共に動橋にて下車す則ち茶亭に入り荷車を借り諸用具茶菓等を滿載し校丁之を引き予等之を援く迂々蜿蜒々た

る田畔の經路草葉半ば侵して泥濘脚は冷かゝ三人協力頗る難氣息湍々として汗背を洩し臍頭甚だ苦しむ忽ち前程校旗を認む勇氣百倍乃ち到れば茅屋(決勝点)倚り倚り福見先生欠伸再三待つこと久し須臾もして競走者の先鋒中村氏韋駄天走りに砂礫を飛ばし來る之より諸勇士相續ぎ余等三人紙筆に苦み狼狽狂藉十二時頃指定の宿へ行けは衆皆集り或は厨を開きて空腹を醫するあり或は爐を圍みて濡衣を乾かすあり或は浴するあり臥するあり意氣軒昂今日の功を誇るあり余等直ち競走者の審査計算をなし二時高安校長優勝者四十名に賞牌を授與し特一等より五等迄の五氏に賞品を與へられ校長及び上田部長諸士本日の勞を慰せられ次て茶菓及び高安校長の寄附に係はる紅果數千個を饗應せられ時既三時半壯語快談両脚愈激し衆皆輕裝短簍直ちに小松を衝くあれば一笠動橋に向ふもあり余篠原に實盛の古墳を吊はんとして果さず乃ち後丘に登りて湖邊の小天地を賞し直ちに動橋に向ふ午後八時金澤に着し二百の健兒紅燈点々凱歌雨を破りて歸校

萬歳を三呼して各歸路に途く。

附言す當日受賞者の姓名左の如し

一等、五十三分二十秒	中村 惠(三年)
二等、五十六分十五秒	吉野 要(一年)
三等、五十八分三十秒	井上 只次(三年)
四等、五十八分三十二秒	濱地藤太郎(三年)
五等、五十九分三秒	福岡 捨雄(二年)
五九、四 千田 常外(二)	金平鐵太郎(三)
五九、五 笹田 順二(二)	牛塚榮太郎(二)
六一、一七林 良 吉(四)	太田 友一(四)
六二、四 荒木 淑人(一)	近藤 琢賢(一)
六三、三 永江 直之(四)	齊藤 賢徳(四)
六三、五 松田 研夫(四)	林 節 雄(二)
六四、 山下 銀吾(二)	古市 勝治(二)
六五、 棒葉 左傳(四)	角張 喜一(一)
六五、一 柴原 外男(一)	岡田 甚英(二)
六五、三 佐藤 軒二(二)	近藤 勇記(二)

六五、七 中川 喜(二) 六五、八 藤井 保二(一)
 六五、九 吉川 幸作(二) 六七、三 原 久雄(一)
 六七、五 青木 正枝(三) 六七、五 今村 文碩(一)
 六七、七 柳 榮太郎(三) 六七、八 前野 七郎(三)
 六八、一 原 清 八(三) 六八、九 水谷藤次郎(三)
 六八、九 下村義二郎(三) 六九、一 堀田 圭三(四)
 六九、一 堀口眞太郎(一) 六九、三 比嘉 永饒(一)
 六九、三 河口 賀眞(一)

嗚呼快なる哉同窓相伴ひて此行を企つるや校友會は己の
 体育の忽にすべからざるを知りて運動を獎勵し劍道柔道
 弓術部を設け膽を鍊り確固の志を養ふ唯怨むらくは此の
 二者多く一堂の中は勝敗の運を爲す時又浩然の氣を養ひ
 天地の正氣を取る遠足に若くはなし自由なる下廣濶なる
 地上我は唯遠足部あるのみ是は於てか吾輩鬱屈の氣を伸
 ばし蒼々たる晴空は嘯き渺漠たる平原は吼ゆるの唯遠足
 あるのみ又以て文氣を養ひ膽力を練るに足る然れとも今
 日の行を見るに諸士徒は名利を走り勝敗を事とし天然の

賜寶に浴し秘美を探らんとするなし校謬れるか士誤れる
 か吁！身を幽寂の境に投じ思を宇宙の玄靈に馳せ精を天
 地の眞理に凝らす時は怪い哉世の文明と化し人の開化と
 は云へ舉世溷濁人情薄弱徒に名利に馳奔す、清志淵に沈
 み鷗鵠高く翔りて鸞鳳跡隠し猛鷲翼を奮ひて窮鳥愈悲し
 むあゝ是れ果して何の象か半宵青燈の下轉た身心然たら
 ずんばあらず(有、一、生)

○實彈射擊演習 醫學科第二年生并に藥學科第二年生は
 去る十月二十七日實彈射擊演習を上野練兵場に行へり因
 に記す本日に於ける好射手及得點左の如し但し彈丸五發
 滿點二十五點

龜井 權六 十六點	田邊 傳六 十六點
福島 可輔 十六點	谷澤 一郎 十四點
清水 省三 十四點	岡村 俊照 十三點
林 節 男 十三點	高 橋 十二點
萩野 隆光 十二點	竹内義一郎 十二點

第十卷雜誌第二十五號

江村 正也 十一點 山下 銀吾 十一點

松尾 等 十一點 成田 成治 十二點

池野 清政 十一點 建部鈴二郎 十點

松井 源長 十點 彦坂 誠一 十點

丹羽 佐忠 十點 等

○醫學科第四年級々會 十一月八日午後三日より本校濟々堂に於て開催す、高安校長、木村教授、大西教授及福見助教の臨席あり、學生の側に於ては一名の欠席者もなく頗る盛會なりし、午後六時半散會。

○醫科第三年級々會 秋風肅爽として宿雨新に霽れ、星辰燦爛として哀鷹聲を曳く、時は十月四日午後六時、夕陽正に沈まんとする頃濟々堂に會する者四十、座に劉伶佳肴なしと雖も清話諧謔友情轉た濃なり、演説あり講話あり、討論あり、講話あり、落語あり、口角泡沫を飛ばす氣焰家あれば、憂々黑白を爭ふ風流子あり、予曹亦秋來机頭感想妄惱無限の暗愁を散したりき、惜らくは教授講師諸先生の出席少なりしと(小川、松田先生のみ)同

窓生過半の欠席なりき、九時愛を割き散々歸路につく、
○醫學科第一年級々會 十月廿四日午後一時本校濟々堂に於て第一會級會を開く元來本級會は新入學生入校初會のものなりしを以て己むなく各部委員の之れが非常の勞を取る會するもの殆んど壹百外に高安校長、石川教授、磯田、福見の両体操教員諸先生諸學生の講話等及び劍舞ありて午後五時散會先つ初會としては中々の盛會なりし會費七錢。

○分教場生徒取締所の設置 再來第四高等學校庶務課内に併置せられしも不便少らざるを以て今般分教場に於て生徒取締所を設置し福見助教授其の任に當られたり。

○本會曩に圖書館擴張の爲め廣く書籍寄贈を乞ひしところ今回醫學士石原弘氏より著書藥物學一冊寄贈せられたり深く謝する所とす。

○卒業生諸氏の書籍寄附 今年卒業せられたる加納氏外四十九名より金員を寄附せられ圖書購求方を雜誌部に依頼せられたり。

○入學試驗及第の結果　醫學并に藥學科撰拔試驗は去る七月二日より本校内よて舉行せられたり入學志願者は醫學科に於て百九十一名藥學科に於て二十五名なりき之れを昨年比するに醫學に於て二十九名藥學に於て二名の増加を見る吾が校の前途卜すべきか右志願者の内醫學科百名醫學科二十名の入學を許可せられたり

丹羽直福井

第十卷雜著第二十五號

全	西村政吉(石岐)	醫學科第一年級
全	西村米吉(福井)	全
藥學科第一年級	西澤寬次(長野)	全
醫學科第一年級	堀口眞太郎(群馬)	全
全	本城熊三郎(三重)	全
全	渡邊數唯續(沖繩)	全
全	戸井源吉(山口)	全
全	富田寛(北海道)	全
全	戸谷慈一(岐阜)	全
全	小田利吉(新潟)	全
全	織田秀時(富山)	藥學科第一年級
全	小野林利一(大阪)	醫學科第一年級
藥學科第一年級	太田宇一(石川)	藥學科第一年級
醫學科第一年級	渡邊復介(愛知)	全
全	渡邊常三郎(廣島)	醫學科第一年級
全	神岡藤一郎(新潟)	全
全	河口賀眞(山梨)	全
全	影山清美(島根)	全
藥學科第一年級	金子精一(京都)	全
全	川勝寛三(岐阜)	全
全	金堂圓(福岡)	全
全	海津四郎(三重)	全
全	吉武安男(大分)	全
全	吉野要(長野)	全
全	米澤知藏(三重)	全
全	横地靖(愛知)	全
全	横山鼎(長野)	全
全	吉尾開道(石川)	全
全	龍田恭齊(岐阜)	全
全	高坂喜文(長野)	全
全	田中義雄(埼玉)	全
全	高橋義作(富山)	全
全	高保二(石川)	全
全	曾野茂吉(和歌山)	全
全	曾根章(愛媛)	全
全	辻實治(兵庫)	全
全	津田信吉(愛知)	全
全	中谷正範(大阪)	全
全	村山貞二(石川)	全
全	村山政治(新潟)	全
全	村本淳吉(石川)	全
全	村山常三郎(青森)	全
全	内海友七(兵庫)	全
全	野村敏(福井)	全

藥學科第一年級
全
醫學科第一年級

[illegible]

宮崎善六	湯淺啓一	貴島善兵衛	北川光雄	木村松三郎	木谷義太郎	眞田幸平	澤田辰造	青木寛之	秋山八百藏	青木市次郎	秋野定吉	荒木淑人	足立諒	芦澤昭	江藤幹	龍惠	小島捨次	近藤琢磨	小高側四郎	郷茂樹	小出貞次郎
(石川)	(福井)	(大阪)	(大阪)	(石川)	(和歌山)	(静岡)	(大阪)	(福井)	(新潟)	(岐阜)	(山形)	(石川)	(福井)	(福島)	(島根)	(兵庫)	(福井)	(廣島)	(岡山)	(岐阜)	(奈良)

▲退會者

渡邊常三郎

が

▲死亡者

校外特別會員（六月二十七日）

通常會員
(七月三十一日)

全
(八月四日)

*
*
*
*
*
*

小	林	沼	小	太	横	中	大
林	田	田	島	田	江	野	河
程	寛	外	捨	字	清	彌	由
太郎	一	太郎	次	一	九郎	吉	藏

通
信

○金子教授より通信
(石川教授宛)

拜啓昨日當地安着仕候間御安神被下度伯林にて山崎君の世話になれり（中略）小生は本月中休養の上入學の手續に致度存候昨日一寸ムゼウム參觀す何れも驚くことはないが只標本の美麗にして夥しきは浦山しきことなり本場の

伯林は却て不潔亂雜なり Prof. Reix 氏は Director なり
死体はカルボール注射の後グリセリンアルコール混液を
塗附するのみにして押入に貯へあり三年を保存すと云ふ
(下略)

十月二十三日

Uhland str. 81, Halle a/s.

○在東京本校出身者同窓會報告

(十一月十八日松原三郎君通信)

時の過ぎ去るは早きものと知りながらも今更の如く
思はるゝはやはり凡人界を超脱することが出来ないから
でしやう顧れば實父の病氣の爲め三年目になつかしき故
郷に歸りて久し振りに學校や病院を訪ふことができて親
しく教を受けた先生や互に遊んだ友人に逢ひ且つ問ひ且
つ語ることを得て誠に愉快でありましたが柱とたのむ實
父に死に別かれ浮世を運命とは斯うしたもの哉と半は、
悟り半は、悟り兼ねて九月一日新橋の停車場に着いたが
いつもと違ひ愉快な氣持がしなかつた併し花の都の變化
や進歩のはやいのに驚いた始終東京に居れば左程に思は

ないが田舎に二ヶ月余り退いて新たに東京へ出直すと著
しく感しられる。

氷店の旗が除かれて咖啡店の看板が出てラム子の瓶が片
附けられて蕪蒸す煙が上る様になつたも道理！今迄待ち
に待つたる涼風も今は小言を載き麥藁帽子も我慢の強き
書生と誂らるゝ時候となつて都の人は入谷の朝顔も夢と
過ぎ日曜毎にはやれ瀧の川の紅葉だのやれ團子坂の菊見
だのと騒きたちれや／＼早やろんなになつたかど人に聞
けば笑の種！田舎の人は見るべき淺草は俗だとたかをく
ゝり上野に白馬會の油繪を駄評するは年中顯微鏡の視
野外に天地なしと思へる我等には最大の氣晴してありま
す。

今や秋高ふして馬肥ふるといふ好時期となりましたから
之に乗して吾校の同窓會を開き郊外を散歩して校友互に
語り互に笑ふて晴天の下に和樂なる團樂をやり度い積り
て且つ爾來は各同窓校友の居る教室や病院内で隔月同窓
會を開き各教室や病院の設備、器械、圖書、標本、患者等を

縦覽し各自の經驗談や失敗談を打ち明け雜誌などにある新しい學說や報道や業績を紹介して互に智識を交換し親睦を厚うするといふ仕組にあり度い考で各友人に相談した所が皆なの人々も大に賛成せられて乞ふ主唱者よりはじめよとの注文により去る十一月十六日の日曜午后一時より吾が精神病學教室でやつた。

はじめの企劃では十六日午后一時迄に精神病教室のある巢鴨病院へ集合し午后三時田端驛迄徒歩し田端から瀛車にて王子に行き王子で下車して瀧の川の紅葉を眺め晩刻に王子より再び瀛車にて上野に歸り此處で散會する積りでありました。精神病教室の講堂を會場に充て此處には精神病學に關する一般の書籍と西洋雜誌のみならず尙ほ内國に於ける最近の總ての雜誌を排列し又た五六臺の顯微鏡を置きて余が研究中なる數葉の標本と余が教室に備へ付けある大形の腦標本を供覽し其他解剖によりて得たる數ケの標本と數ケの器械とを排置し茶菓を喫しつゝ互に談笑し傍ら躁狂、定期性躁狂、緊張狂、妄想性痴狂、

痲痺狂等の患者を順次供覽し之より研究室動物室、病室を順覽せるに日既に暮し故瀧の川行を止めて病院から例の豊國樓に歸り此處に晩餐を喫し互に學校時代の既往を語り現在の境遇を自慢し未來の抱負を吐き談は滔々として盡きさりしかどあまり遅くなりし故散會した時正に夜の十時頃であつた。

此度の會に集まつた者が委く争を執つて在獨逸國の山崎先生及び北氏へ健康を訴る書を發した金子先生の所が分らないので送るとが出来なかつたのは遺憾であつた。兎に角今度からは大に會合の趣味を變へたので頗る愉快であつた唯だ遺憾であつたのは會合の時日が切迫し且つ當日は曇天であつた爲め會合者が頗る少ないことであつた殊に感謝すべき渡君が遠路にも拘らず例によりて態々上京せられ參會せられたことであつた全君の熱情は筆紙に盡くすことか出来ない友あり遠方より來る程樂しきこととはない亦當日參會者は小生が撮影すべき考て居つたけれども會談の愉快に忘却して兼て撮影すべく目論んで居

つた場所へ皆なを案内しつゝ來た時にハタと思ひ附いたけれども時既に日没であつた爲めトウ／＼撮影すること出来なかつた實に遺憾此上もなかつたが併しこれば當日の會合が如何に愉快であつたかゞ十全會員諸君も御分りになることと思はれる、當日會合の諸君は左の如くてあつた。

渡 孚貞君

渡邊喜一郎君

島田吉三郎君

生沼 曹六君

森田 齊次君

駿河 尙庸君

久津木勝作君

河野 勇君

酒井佐太郎君

田中 秀夫君

松原 三郎

○高岡高勝氏の通信

(前略)小生事本年一月中旬より自宅開業の目的を以て諸般の準備に取りかかりろの月末に及びて漸く不充分ながらも整頓致し二月早々開業披露の運に至れり爾來今日まで従事(父と共に)致居候處御承知の通り本年は小生の徴

兵検査に就き一年志願兵を止めて並兵の仲間入りて去月十二日被檢せられしも血氣旺盛なる百姓連中の壯丁に挟まり居ること故小生の如き吹けは倒るゝが如き者は流石な醫官も見抜きしと見へ遂に不合格の不仕末を演じ誠に慚愧の至り候之れ余が平素在校中も体育を輕じたるに起因すること口惜きこと限りなく候(中略)聊か開業上の必要なる点に就き殊に本年度も卒業せらるゝ知己も澤山有之筈なれば一言申上べく候吾々は新進者なる故余等の手腕を試みんとて兎角疾病は病院のクリニック的ならずして問ふ人なく學ぶ師なく只だ自己の實力に據るの外なく加ふるに外來患者の過半は他醫の診察を受け在葛治せざる難症患者多く稍もすれば附添人及び患者より病石豫后を問はる此の際充分に注意して病狀を確めざる可らずとは諸氏の知らるゝ所なるも之は在學中の一理想も過ぎざることと思ひ居り候へども實地開業の曉は全く之と相反し思半ばに過ぐるもの多々有候尙ほ一言せんとするは(特は不便なる地に於て開業せんとするの士)獨

身患者治療の傍ら普通一般の調劑術を知らざれば投藥の際屢々困却すること有之候に就き眼前に多くの藥品を陳列し投藥し能はざる愚を學ばざる様願上候敬具

○香港に於ける所見

特別會員 宮井勇 記

記者曰く本編は曩に我が政府英政廳より香港防疫事業の倚頼に應じ本年四月在東京北里傳染病研究所技手松王數男氏は同所長の撰拔に由り派遣を命ぜらる過日同氏より予の許に寄せられたる書信より主衛生上に關せる事項を摘録したるものなり

(地勢及び住民)、香港は廣東省の南方九龍かうろんと相對峙し長さ十一哩幅員二乃至四哩周廻二十七哩を有する一孤島にして地盤渾て是岩石より構成せられ地表到處凹凸不平ならざるは鮮し寧ろ本島を指して蒼海に屹立せる一岩丘と看做すを隱當ならんとす香港英領に歸してより既に六拾有餘年を経其の間英人の營々慘憺たる事業は香港の今日あるを見るに至りたる所以なり、本島の住民は其の多數

は支那人の占むる所之れに次て葡萄牙人を多しとす今左に其の概數を擧ぐれば支那人二一四、五四三人葡萄牙人一、九五六人印度人一、四五三人日本比立賓人合せて九〇三人高加索人二六一人其他の歐洲人三、八六〇人其外陸軍兵一、六四〇人海軍兵五、五九一人とす、

(本年發生せる疫病の蔓延)、抑も本年に於ける南清一帶の惡疫蔓の經路を尋ぬるに上海、廣東、香港西には新嘉波、孟買、南は馬尼拉、比立賓群島或は濠洲しどに「其他」くゐんすらんど洲等に散蔓し流行を逞ふせり初め上海には猩紅熱の流行熾盛を極む當時我が内務省より技師一名を派遣し之が調査に従事せしめたり此の流行と時を同ふして廣東に虎疫猛進猖獗を極め延て此隣の香港馬尼拉等に及ぼせり殊に香港の如きは年々歳々百斯篤の流行に苦しむに尙且つ此虎疫の蔓延を以てし島民爲めに恟々堵に安んずるを得ざりき予の着香當時香港及び廣東に於ける虎疫猛烈を極めたる原因を探究せしに職として飲料水の欠乏よ由る飲料水の欠乏は昨年以來天一滴の雨を降

さる爲めに水源地は涸渴し島民給水の途を失ふの悲愴の狀態を演ぜり是れ病毒を招かざらんと欲するも得べからざるなり然るに本年五月中旬より大雨頻來し病毒を一掃するを得たり然れども病毒歩を東轉して廈門漢口、上海、北清一帶の各港に到り次て韓海の沿岸を越えて我が邦土に波及したるもの、如し而して香港に蟠居せる百斯篤病毒と明治二十七年（千八百九十一年）一たび印度地方より輸入せられし以來當港に出入船舶貨物の運輸頻繁を極むるが故に病毒倏ち四散の途を得南洋群島より延て臺灣進んで本洲に其の害毒を流せり百斯篤一旦香港を根據とするや其勢猛烈底止する所を知らず他なし香港に移住する人民中大多數を占むる支那人は病毒撲滅の念慮に乏しく反言すれば防疫思想に無能にして傳染病患者を見る常人の如く來往出入常に異ならず恬として顧みず或は疾病を隱蔽す若し官の看破せらるゝ所とならんか頑冥固陋の彼等は逸早く密かに逃走離散を企つ官廳は防疫規則の勵行を命ぜんか乍ち暴徒の勃興となり或は一家一族舉て

逃逸す是れ官廳の懼るゝ所なり何爲る然るや香港一に經濟的顧慮にありとす試みに看よ香港に於ける歲々の貿易額は實に五億參千萬圓の多きに達す之を我國最近明治三十一年に於ける五億貳千貳百餘圓に比尙超ゆる事斯の如し香港は東洋第一に推さるゝ貿易商業の地若し一朝船舶の出入を禁し貨物運輸を絶たんか經濟上一大波瀾を喚起し英政廳亦財政の窮を告ぐ是を以て防疫施行の處置自ら寛慢に附せらるゝ所以なり

（現時衛生防疫の狀態）、香港の防疫事業の完全せざるや亦幾多の缺點の存するに由る即ち市街の狹隘、高層且不潔の家屋、移住民の比較的多數は正に之が原因たるべし今家屋に就て一言せん渾て皆五層乃至六層の建築にして天空に聳立す家屋櫛比山腹を匍匐するの觀を呈す一朝傳染病患者を數階上に出でんに、消毒至難にして到底完全なる消毒法得て望むべからず若し又階下に發生せんに交通遮斷は階上多數の住民に影響を及ぼすや大なり加旃支那人の弊僻無頓着なる多くは家什器具を携行して潜か

に他に轉遷するを以て只其の空室を消毒するに過ぎず該消毒法とても簡單にして居室の四壁及び床上を一二%「くれをりん」にて洗滌するに止む携帯したる家什器具は依然無消毒に平然として使用するが故に速に病毒の散蔓容易にして風の塵埃を散ずるゝ似たり而して當島に於ける鼠族驅除は亦昨年來より始められき捕鼠買上の價額は一匹三錢なるも凡ろ一家より數匹の鼠を發見するときは必ず消毒の煩累を免れずとの恐怖心よりして二匹以上を賣すもの莫く他は街頭に棄却するを常とす是亦病毒蔓延の一因となる島内には潔淨局 (District sanitary office) なるものゝ設けあり日々數千名の苦力を市内に巡行せしめて鼠族の捕獲に従事せしむ斯くの如くして日々集むる所のもの三百餘に達す然れども此の鼠族驅除は有名無實虚飾の業に過ぎず予等着香以來以上の諸點に就き深く當任者の注意を促すと雖奈何せん住民の頑愚なると衛生官の微力なるとは吾人に満足を與へざるなり然れども捕鼠一匹三錢のものをして更に高價に買取せば如何に煩累の

事と雖貪慾心に富める支那人はいかて躊躇すべきや日に容易に數千匹の捕鼠を獲るや瞭然たり然れども現時の狀態に在りて微力衛生局には絶對的望むべからざる事とす其他健康診斷豫防血清注射の如き防疫事業は只白人にのみ實行し得るも支那人に對しては禁忌とす是れ其の頑冥固陋舊守の支那人之の舉を耳せんか忽ち遁走を企つるか或は暴動に出づるの恐あり例せんに現に彼等の屍体取扱上に於て若し疫體にして之を燒却せば團結暴起する事日迄幾回なるを知らずと防疫の十全ならざる亦推知するに足る市内には屍體檢査所 (Public mortuary) ありて疑はしき屍體を集合するに供す而して該屍體は病理解剖及び細菌學檢査を施し檢本了れば屍體の何たるを問はず細長の棺に藏め石灰を撒布し遺族の手に渡すを例とす但だ疫體は警官干涉の下に一定の墓地に埋葬せしむ然れども一旦遺族の手裡に歸するや危險甚しとす、島内には陸海軍所轄のものを除き二大私立病院及び市立避病院あり前者に屬するものは Civil hospital 及び peak hospital とす其

他支那人の設立する所のもの數個ありと雖就中東華醫院 (Tungwa hospital)・那打素利醫院 (Nethersole hospital) を其の主なるものとす此等病院の設ありと雖支那人の疾病を隱匿する以て院内僅かに十名内外の患者を收容する而已彼等は死して後初めて官に訴ふるを以て止だ屍體検査所の執掌を極むるのみ而して此等病院の醫師は草根木皮を唯一の治療藥として用ふるの支那醫及び舊式固守の英醫とす英醫は今日尙ほ藥品を量るに「げれん」法を用ひ體溫計測は華氏の驗溫器を用ふ其他手術的治療に於て消毒なる觀念は腦裡に空し殊に最も首要なる細菌學的裝置不完全を極め從來島内には一臺の顯微鏡を以て避病院と屍體検査所の需用に供したりしか予等着後二臺の新顯微鏡の漸く購はれたる有様は吾人をして一驚を喫せしめたりき其他細菌學的検査に要する培養器試験管の具備するなく二百個の試験を全島を通して集め得たるが如き又消毒釜は明治廿七年北里青山兩博士の一行來りて使用したるもの今也朽廢したる歴史的遺物の現存するのみ斯の如

き不完全なる機關を以て防疫の實を擧ぐるを得べきか咲するに堪たり、完結

* * * * *

實 告

○寄贈及交換書目

(十一月十日迄ニ領收ノ分)

岡山醫學會雜誌	一四九五〇、一二三	同	會
醫科器械月報	二三、四、五、六	同	社
好生館醫事研究會雜誌	九ノ三、四	同	會
藥石新報	四三、三、四、五、六、七、八、九、四〇、一二、三、四	同	社
產婆學雜誌	三三、二、三、四、五	同	會
日本醫事週報	三八、五、六、七、八、九、四〇、一二、三、四	同	社
醫海時報	四〇、一二、三、四、五、六、七、八、九、三〇、二、三、四、五、六、七、八、九	同	社
東京醫事新誌	二二、三、四、五、六、七、八、九、七〇	同	局
醫事新聞	六二、六、七、八、九、二〇、一二、三、四	同	社
中外醫事新報	五五、六、七、八、九、四〇、一二、三	同	社

第十全會雜誌第二十五號

衛生談話 一八九〇、二一	通俗衛生茶話會	北越醫學會々報 二九、三〇、	同
東京醫學會雜誌十六ノ二、三、四、五、六、七、八、九、三〇、	社	植物學雜誌 一六ノ一八、四、五、六、七、	東京植物學會幹事
體育 一〇三、四、	日本體育會	廣島衛生醫事月報 四三、四、五、六、	同
獨逸語雜誌 四ノ一〇、一、二、五、一、二、三、	同	藥學雜誌 二五、六、七、八、	日本藥學會
皮膚科及雜誌 二ノ一、二、三、	日本皮膚學會	私立山梨病院々報 二二	高橋貞碩君
泌尿器科 七四、五、六、七、	助產婦學會	軍醫學會雜誌 二九、三〇、一、	同
校友會雜誌 二六、	京都醫學校々友會	日本眼科學會雜誌 六ノ六、七、八、九、一〇、	同
國家醫學會雜誌 一八、三、四、五、六、	同	成醫會月報 二四、五、六、七、八、	同
醫談 七、四、五、六、	獎進醫會	學士會會月報 一七、三、四、五、	同
產科婦人科學雜誌 四ノ七、八、九、一〇、	同	胃腸病研究會々報 三ノ一、二、三、四、五、	同
藥業報知 三九、	同	公衆醫事 六ノ六、七、八、九、	同
日本助產婦新報 五、四、五、六、七、	同	神經學雜誌 一ノ三、四、	日本神經學會
藝備醫事 七、三、四、五、六、七、	同	大日本耳鼻咽喉科會報 八ノ四、五、	同
大日本私立衛生會雜誌 二九、三〇、一、二、三、	同	東京府巢鴨病院醫事年報(三十四年)	同
東北醫會々報 二五、	同	日本消化機病學雜誌 一ノ一、二、三、	同
順天堂醫事研究會雜誌 三、四、五、六、七、八、	同	研瑤會雜誌 四九、五〇、	同
濃飛醫學會雜誌 六、	同	北海醫報 二ノ四、	北辰病院研究會

中央醫學會雜誌 四六七

齒學研鑽 三ノ三

靜岡縣醫學會々報 四

教育公報 二三

製藥士櫻井小平太著
新藥摘要 壹部壹冊

臺灣醫學會雜誌 二三
醫學士佐藤勤也編纂
新訂實用產科學 壹部貳冊

新訂實用婦人科學 前編壹冊
八版實用婦人科學 前編壹冊
橋田謙藏譯

產科手術學 壹部壹冊
宇出謙吉著

新訂實用小兒病學 (再版) 壹部壹冊
增補實用小兒病學
醫學士下平用彩著

十一版診斷學后編 壹冊
醫學士今村保共著
醫學得業士北豐吉共著
醫學得業士北豐吉共著
醫學得業士北豐吉共著

躬行會叢誌 五

東京教育時報 二五

石川喜直編
解剖描寫帳 壹部四冊

校友會雜誌 三

校友會雜誌 二六

同 會

同 發行所

同 會

帝國教育會

櫻井小平太君

同 會

佐藤勤也君

佐藤勤也君

楠田謙藏君

宇出謙吉君

下平用彩君

同 會

東京市教育會

石川喜直君

千葉醫學專門學校同會

東京開成中學校同會

校友會雜誌 二六

特別寄贈

獨逸語學雜誌 三年(一九二二、四年) 同

醫學士石原弘著
藥物學 一冊

○十全會會費領收 (治明三十五年十一月二十九日)

金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	安宅 治六君
金參圓	五ヶ年分	(自三十四年度至三十八年度)	吉田 幡誠君
金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	谷中 正勝君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	藤井 助雄君
金參圓	五ヶ年分	(自三十四年度至三十八年度)	平賀 東吾君
金參圓	五ヶ年分	(同)	赤倉嘉久雄君
金參圓	五ヶ年分	(同)	園崎純次郎君
金參圓	五ヶ年分	(同)	藤井榮四郎君
金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	松浦 啓三君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	眞柄佐一郎君
金參圓	五ヶ年分	(自三十四年度至三十八年度)	金子太須計君
金壹圓	三ヶ年分	(同)	高岡 高勝君
金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	木下 克雄君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	深美貞之助君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	橋本監次郎君

三重縣立第一中學校同會

石原弘君

金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	村山 悅治君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	高田 文齊君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	川北 辰吉君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	福岡 喜洋君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	村本 笹次郎君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	石黒 均造君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	齋藤 幸作君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	原田 正廣君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	吉崎 郡太郎君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	米澤 恭次君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	千葉 玄也君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	島 誠郁君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	吉川 砥直君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	谷口 長松君
金參圓	五ヶ年分	(自三十五年度至三十九年度)	米村 吉太郎君	金壹圓	三ヶ年分	(同)	上	鎌田 勘之助君
金參圓	五ヶ年分	(同)	吉崎 郡太郎君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	桑折 直君
金參圓	五ヶ年分	(同)	千葉 玄也君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	伊野宮 長民君
金壹圓	一ヶ年分	(三十五年度)	村本 笹次郎君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	築山 英雄君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	松井 梅二郎君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	松村 魁君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	高松 岩吉君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	辻村 耕夫君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	吉川 砥直君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	熊澤 清隆君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	北川 健三君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	太田 長作君
金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	北川 健三君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	宮越 常次郎君
金壹圓	一ヶ年分	(三十五年度)	崎 達郎君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	都築 熊藏君
金壹圓	一ヶ年分	(同)	山田 孝太郎君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	堀井 吉平君
金壹圓	一ヶ年分	(三十四年度)	山田 敏雄君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	井原 悟君
金壹圓	一ヶ年分	(三十五年度)	土田 久三郎君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	尾倉 一英君
金參圓	三ヶ年分	(自三十五年度至三十七年度)	清水 秀夫君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	富田 稔廣君
金參圓	三ヶ年分	(同)	藤浪 謙君	金參圓	三ヶ年分	(同)	上	越田 信吉君

金參圓	三ヶ年分 (同)	上	小山 庄治君
金參圓	三ヶ年分 (同)	上	増田 貞吉君
金參圓	三ヶ年分 (同)	上	林 正雄君
金參圓	三ヶ年分 (同)	上	森岡惣太郎君
金參圓	三ヶ年分 (同)	上	野嶽 利七君
金參圓	三ヶ年分 (同)	上	牧 良一君
金參圓	三ヶ年分 (同)	上	井口 正察君
金壹圓	一ヶ年分 (三十五年分)	上	高松 多齊君
金壹圓	一ヶ年分 (三十四年度)	上	磯谷 孝慶君
金參圓	三ヶ年分 (自三十五年度至三十七年度)	上	齊藤 義雄君
金參圓	三ヶ年分 (同)	上	八田 智証君
金壹圓	三ヶ年分 (同)	上	加納 景成君
金壹圓	一ヶ年分 (三十五年度)	上	河野 勇君

一金壹圓	藏 尙太郎	一金壹圓	千葉 玄也
一金七拾錢	金子太須計	一金六拾錢	大西 瀨治
一金五拾錢	望月 慶作	一金五拾錢	生沼 曹六
一金五拾錢	小西 俊三	一金五拾錢	大極 豐
一金五拾錢	野村 亮吉	一金五拾錢	渡邊九壽松
一金五拾錢	高松 岩吉	一金五拾錢	澁谷 孝慶
一金五拾錢	竹松 衛	一金五拾錢	安宅 治六
一金五拾錢	沖野彌一郎	一金五拾錢	白井 精一
一金五拾錢	田中 正一	一金五拾錢	三木 三郎
一金五拾錢	森島 彦夫	一金五拾錢	眞柄佐一郎
一金五拾錢	津川 恒	一金四拾錢	東 良平
一金卅五錢	三木 榮末	一金廿五錢	北川 健三
一金廿五錢	木下 克雄	一金廿五錢	深美貞之助
一金貳拾錢	河野 勇	一金貳拾錢	中西 吉太

●山崎教授へ金牌贈呈等寄附金

交名(第二回)報告

一金貳圓	小川 爲吉	一金壹圓	藤井 助雄
一金壹圓	中野 才幸	一金壹圓	杉山 弘齊
一金壹圓	小島 佐藏	一金壹圓	小林 茂樹
一金壹圓	國分 金城	一金壹圓	高橋野常作
一金壹圓	鈴木寛之助	一金壹圓	杉山 政長

合計金貳拾四圓八拾八錢
通計金四拾五圓五拾參錢

●正誤 第一回報告中金壹圓高松多齊ハ金參圓ノ誤

青木他次郎ハ他吉郎ノ誤

●精算報告 紀念品出來ノ上追テ報告スベシ
右廣告候也

明治三十五年十月七日

發起人一同

廣告

○故米澤啓君紀念書購入寄附金

本日迄領收セシ分

金貳圓	金澤醫學專門學校教授助教授講師助手諸彦	金貳圓	杉山 弘齋君	金壹圓	山崎芳太郎君
金壹圓	小林 茂樹君	金五拾錢	飯塚 忠勇君	全	湯本四郎右至君
金五拾錢	武曹 三郎君	金壹圓	杉山 政長君	全	瓜生 尹重君
金壹圓	米村吉太郎君	金貳拾錢	花岡佐大郎君	全	東 良平君
金貳拾錢	館 昇 榮君	全	齋藤 賢德君	全	林 良吉君
全	棚田 佐吉君	全	越田 信吉君	全	春田久太郎君
全	土田久三郎君	金拾錢	八田 智証君	全	堀井 吉平君
金拾錢	横井清九郎君	全	鎌田勘三郎君	全	寺田久一郎君
全	伊野宮長民君	全	全	全	福田 靜君
全	全	全	全	全	丸山 六郎君
全	全	全	全	全	増田 貞吉君
全	全	全	全	全	清水 秀夫君

次號原稿締切期限

轉居

山田義忠

金澤市殿町二十八番地

金拾錢	川端 清隆君	金拾錢	都築 熊藏君
全	森岡惣太郎君	全	藤原 敏夫君
金五錢	森岡 喜洋君	金五錢	小原 貢君
全	築山 秀雄君		

以上 發起人一同

本誌次號三十六年二月上旬發行の豫定につき一月二十日迄に續々玉稿御投寄あらんことを切望す

明治三十五年十二月

十全會雜誌部

本號紙面の都合に依り抄録、慢録を欠く

※※※※※※※※※※